

婦人止子毛



第二卷
第九號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡て左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行	定價	入會者	讀者	編輯	廣告料
毎月一回五日發行○第一卷第一號明治廿四年一月二十日發行	一冊金拾錢○六冊前金五拾七錢○拾貳冊前金壹圓拾錢○郵税各一冊一錢○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。	は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まれるれば雜誌は無代價にて送呈すべし	は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取入金昌堂あてのこと○見金は切手二錢に限り十二枚封入にて申し越されし○前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上に附し候に付き早速御送附下されたく御用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ	に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと	一頁十圓半頁五圓

明治三十五年九月二日印刷
同 年九月五日發行

不許複製

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷者 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

大賣捌所 東京東京堂●同東海信文合資會社●同北陸館

婦人と子ども第二卷第九號目次

子ども

六人の武者修行(やまとの翁) ●信濃蟹藏(雨情)

●腰折雀(翁丸)

懸賞問答

家庭

幼児の友達……………ふみ子

救急所置……………醫學士 長瀬復三郎

昔いろは料理……………石井泰次郎

幼児の腹あて……………岡本ちか子

學術

眼の話(三)……………本郷生

史傳

黒澤登幾子……………下村三四吉

文苑

暴風……………赤堀信成外

曉水鶏……………佐々木信綱外

鈴虫……………ろすい

濱邊の五分間……………濱子

暑中休暇……………楓

説林

本邦古代保育法の一斑(承前)……………下村三四吉

現今の幼稚園保育法につきて……………東基吉

雜錄

海……………川口孫治郎

東京市養育院を見る……………ひさ子

八月九月の異名……………せく生

他人を批評することにつきて……………野本生譯

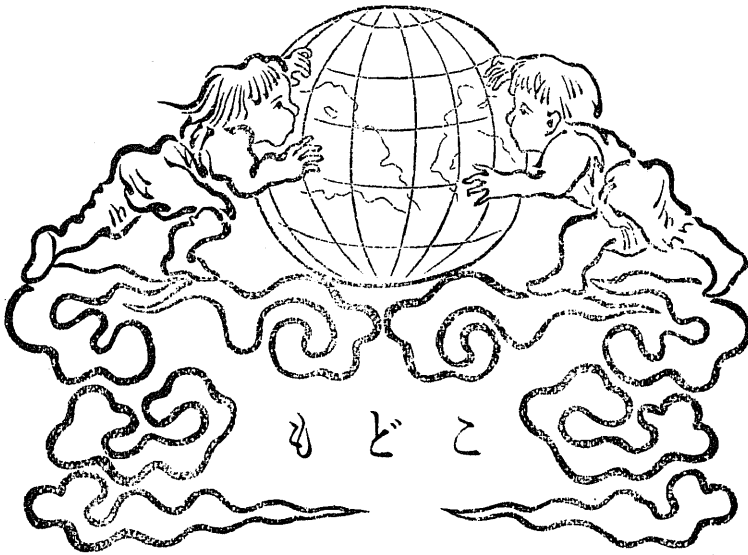
彙報

九重の御消息 ●學びの窓 ●筆の雫 ●東京たより

(擊水生) ●大阪通信(大村芳樹) ●香川通信(通信

員) ●海外彙報

も と 子 と 人 婦
號 九 第 卷 貳 第



六人の武者修行。

やまとの翁

むかし／＼ある所に、兵太郎
 郎とゆう男がありました。
 何か甘い仕事を見付けたい
 ものだと、いろ／＼考えた
 所で、一つ、方々の國々を
 旅行して、いゝ事をさがし
 出そーとゆうので、家を出
 て、だん／＼と、歩いて行
 て大きな森の中え着きまし

た。そこで、兵太郎わ、一本の木の蔭の所に休んで、煙草など



はて、世の中にわ、力の強いものもあればあるものだな

と、思つて、兵太郎わ感心して見て居ましたが、やがて、側え行つて、

兵『オイ、若いの、お前の名わ、何とゆーのか』

飲みながら、ひよつと、向の方を見ると、年の頃二十才許りの一人の男が、十圍もある檜の大木を、丸で藁すべを抜く様な調子で、根ごと何本もく引つてゐて、見て居る内に、十本も引きぬいて仕舞いました。

若『金太郎といーます』

兵『お前の家わ、何所だね』

金『ぢき、此山の下です』

兵『どーだ、先から見て居ると、大變な力持だね、これから、私の家來になつて、一所に行かないか』

金『どーか、お供を願います。けども、今から此薪を束ねて、お母さん所え持つといてきますから、一寸お待ち下さい』
といつて、金太郎わ、十圍もある様な大木を十本一束にして、

『やつと、肩にかついで、走って行きました。』

兵太郎、暫く、そこに待つて居ると、やがて、金太郎わ、すたゝく走つて歸つてきました。

『でわ、これから、二人で直ゆこー』

とゆーので、連れだって出かけました、暫らく行きました所が、
今度わ、向ーの方に、一人の獵人が、片々の膝をついて、鐵砲
をねらって居る。そこで、兵太郎わ、つかくと其側え行つて、
『何をねらって居るのです』

と聞きますと、其獵人の申しますにわ
『なーに、こゝから二里先にある檜の枝に、蠅が一匹、とまっ
て居る、その左の眼を、打とーと思ひますのさ』

これにわ、又兵太郎わ、驚きました。二里もある所の、蠅の、
しかも左の眼を打つとゆーのですから。そこで、名前を聞くと、
『千里眼明』と答えた。夫から、兵太郎が

『どーだ、己の家來になる氣わないか、三人で行けば、世界に
恐いものなしだが』

と申しますと、眼明も、直承知しました。夫で、三人づれにな
つて、こゝから出かけまして、四五里も、歩いて行きました所
が、向一の方に、風車が七つもある、夫が、不思議なことにな
何所にも、風が吹いて居ない、一枚の木の葉も動いて居ないの
に、其風車丈か、七つも揃つて、ガタ／＼と回つて
居ります。夫を見てから、兵太郎わ
『これわ不思議だ、風も吹かないのに、あの風車が獨り手に廻
つて居る。何が廻して居るのだらう』
二人の家來も、皆不思議だ／＼と行って、行きましたが、夫

から二里許も、行きました所が、一人の男が、木の上^六に上つて居て、片々の鼻の孔を、塞いで、片々の孔から、一生懸命に、吹き出して居ます。

『オヤ、く妙な人もあるものだな、オイ、木の上の人、鼻の孔から何を吹き出して居るのか』

といって、下から兵太郎が、尋ねますと、其男わ、木の上から

『お前さん、こゝから二里半前に、風車が七つありましたろ。』

私わ、こゝで、鼻の孔から、其風車を吹き廻して居るのです』

『オヤ、これは又、えらい奴だ』と、兵太郎わ、心の中で感心

しまして、名前を聞くと、『風尾吹彦』といいます。

『どーだ、吾々四人揃って行ったら、天下敵なした。今から已

の家來になつて、行こーじやないか』

といへますと、吹彦もすぐ承知して、お供をします。

さし、愈四人つれになつて、行きました所が、今度出遭つたのわ片々の足にだけ草鞋をばいて、一本足で歩いて居ます。そこで兵太郎わ

『お前さん、何故、片一本の足で歩いて居るんです』

と尋ねますと、其男わ

『イヤ、私わ、走ることが得手なんですが、兩方の足で歩きますと、鳥の飛ぶ様な具合に、あんまり早く走り過ぎるもんですから、この通り一本足で歩いて居ます』。

名前を聞きますと『百里次郎』と答えました。そこで、これ

もまた、兵太郎の家來になつて、いよく五人の同勢で、ゆき
 ました所が、また一人の男に、遭いました。其男わ、笠を横丁
 にかぶつてやつて來ます。そこで、兵太郎が、其男に向つて
 『オヤ、お前さん、何故そんなに、笠を横丁にかぶるので
 す、何だか、馬鹿の様に見えるじゃないか、眞直にしてはど
 です』

と申しますと、其男のゆゑにわ

『さ、之にわ譯のあることです。とゆゑのわ、若し此笠を眞
 直にかぶりますと、甚い冷めたい霜が降りて、其爲に空に飛ん
 でる鳥など、凍つて落ちて來ます、ですから、馬鹿の様だけど
 も、こんなにかぶつて居ます』

この男の名わ、寒井國冬といーまして、又兵太郎の家來になりました。

これで、とーく六人になって、愈々出かけて行きました。さて、手始めに、或國に着きました所が、その王様のお姫様とゆーのが大層、走ることの早い名人なのです。そこで王様わ「己の姫と競走して勝てるものがあつたら、其人に姫をやる。」若し、姫に負けたら、其者の生命を取ろ」と、こーゆーお布告を出して、競走者を探して居ます。六人の者わ、これを聞て『こりや面白い、一番吾々の中から、競走者をだそーじやないか』とゆーことで、早速兵太郎から、『家來の百里次郎をお姫様の相手にさして下さい』と願ひ出しました、すると王様の方で



わ、早速おゆるし下さったが、其代り『百里次郎が負けた時わ、家來の次郎わ申すに及ばず、主人の兵太郎も首がないぞ』とゆーことです。兵太郎の方でも、もとより承知して居ますとゆーことを申し上げて置きました。

さて、いよく競走の日となる、場所わお城の大手前と決つて居る、國中の人わ、今日こそお姫様と、百里次郎との晴の競走だとゆーので、吾もくに見物にくる。一段高い所には、棧敷をこしらえて、王様が御覧になる。

そこえ、お姫様と次郎とが、しづくと并んで出て來ました。見物人は、之を見て、一同に手を拍ってワイワイとはやしました。

競争の距離わ、二十里とゆーのである。即ち、から十里先に池がある、早くそこえ走りついて、一番に其池の水を持ち歸つたものが勝たとゆーことです。そこで、次郎とお姫様とわ、各自手に一つの茶碗を持って、王様の前に立って、一―二―、三―で二人が駆け出したけれども、四五足も一所に并んで走ったかと思ふ中に、次郎の方わ、も―影も形も見えない。丸で颯と風が吹き過ぎた様だ。そこで次郎わ、すぐ十里先の池に行つて茶碗に水を入れて歸つて來かゝったが、途中まで來ると、急に足勞れて、眠くつて堪らなくなつたから、『まゝよ、姫の影わまだ見えない、一寸こゝらで一寢入しましよ―』とゆーので水の入つた茶碗を側に置いて、側にあつた大きな石を枕にして、う

とうとう眠りかけました。

さーお姫様の方わ、一生懸命だ、走って走って、どんく走ってやっど池について、水を酌んで、かけって来た所が、途中でまで来ると、相手の次郎わ、石を枕にして、ぐっすり寝込んで仕舞って居る。之を御覧になったお姫様わ、大喜び『さー、もー妾しものだよ、どーしたって、負けやしないわ』と仰って、走り出そーとしましたが、此お姫様わ、悪い人です、ひよっと、途中で追っ付かれてわ大變だと思つて、そつと側に置いてあつた、次郎の茶碗の水をあけて仕まつて、それから一生懸命に走り出しました。

さー、もー大抵勝負わきまつて仕舞いました。お姫様が一番

になるでし。けれども、そー甘くわ行かない。先程から、
 ひょつとこんな事もあるかと、城の櫓に上って、一生懸命に
 此勝負を見て居った。獵人の千里眼明わ、今しもお姫様が勝ち
 そーになったもんだから、もー之までだと思つて、鐵砲に玉を
 こめて、寢て居る次郎の枕を目がけて、ズドンと一發打ち出
 しました。鐵砲の玉が枕にあたつたので、次郎わ吃驚して、目
 を覺まして、『之わ寢すでした』と思つて、茶碗を見ると、水が
 ない。『さー仕舞った』と思つたが、夫でも力を落さない。又風
 の吹き過る様に走つて行つて、池の水を酌んで歸つて、すたす
 たと走つて途中でとーくお姫様を追い越して、丁度決勝點え
 付いたのが、お姫様より十分丈早かった。(つゞく)

信濃蟹藏

雨情

ひかし〜信濃の國の或山中に永年棲んで居ました信濃蟹藏と申す一疋の大蟹が、ある日こんな事を考へ初めました。

斯う言ふ淋しい山の中で暮らすよりも寧ろ賑な場所へ行つて暮した方が餘ッ程面白くて益だ、しかし人間に較べると蟹は幾ら損だか知れやしない何麼かして人間に成りたいもんだ、何うすれば人間になれるだろう、と苦心の末伊勢の太神宮様を心信すれば人間に成れるだらうと思ひ付きましたそこで蟹藏は急に伊勢詣りと決心しました、又よく〜考へて見ますれば、蟹が伊勢詣りをして人間に成つたと言ふ事が、世間の人の耳に這りでもすると人間に成つてから大に幅が利かないと思ひましたので、何んでも人間の振りをして行く

のが第一だと、そこで何うすれば人間の振りが出来るやうかと思案に思案を重ねて漸く着物を着さへすれば、それで人間の振りが出来るとホク〜者で着物買ひに出掛けました。

『今日は〜、人間の着る着物を見せて下さい。』と申しますと、店の番頭は合點をして種々な品の變つたのを出して見せました、その中で一番安い單衣を買つて蟹藏は山中の住家へ歸つて來ました。

頃は丁度夏の初めで、野や山の草は青々と茂つて、森や林の梢は綠葉に閉されて、何んとなく、すが〜しい日和の朝、單衣に甲を隠して蟹藏は伊勢詣りの途に就いたのです。

蟹藏自身では人間の振りをして居ますが、他から見れば矢つ張り蟹が單衣を着て居るとしか見

ませんので、行き逢ふ人毎にクス／＼笑つて通り過ぎないものは有りませんです、けれども蟹藏はそんな事とは少しも氣が付きませんで、毎日十里づゝ歩いて丁度四日目に成りますと、十里以上もあらうと思はるる程廣い野原へ差しかかりましたすると相憎空が曇つて今にも夕立が来るやうな模様となりました。若しも降られたら大變だと蟹藏は急ぎましたが、その甲斐がなく遂々夕立の爲めに單衣から何にかからかまで身体全体ビシヨ濡れとなつて仕舞いました。

さうする中に夕立も晴れましたので。致方なしに濡れた單衣を着たまゝ急いで漸く野原を抜ける時分には最早すれ／＼に日が暮れて仕舞いました。

すると後から。

『泥棒！泥棒！』と云ふ人聲がしますので、蟹藏は何事かと振り返へつて見ますと、一人の男が馳けて来るや否や、蟹藏の胸元を確と押へまして。

『これ前は去年俺の着物を盗んだな。何にそんな事は知らない……でも前を着て居る單衣は俺の着物だッ。』と言はれましたので、蟹藏は氣が付いて見ますと吃驚致しました。今まで自分の着て居た單衣とは違つて模様も何にも何い白地の晒で着中の真中に大きく「南無妙法蓮華經」と書いてあります。それもその筈。或る泥棒が盗んで、それを染めて店へ賣つたのを蟹藏が買つたのであります。そして夕立に逢つて染めたのが落ちたのを知らずに蟹藏が着て居たのだつたとさ (完)

昔
腰折雀

翁
丸

上 (その一)

むかし、或る田舎の農家に、六十許の爺さんがありまして、家の孫供と一所に、庭の草を取つて居りました。

頃は春の事で、すつかり空は晴れわたつて、梅は花盛り、彼處の山からも此處の庭からも、香のよい風が吹いて来て、庭前に躍つてゐる雀等も、いかにも面白そゝに、大勢の友達と運動會でもするよゝな風で遊んで居りました。

其處へ丁度向うの山から、男兒等の投げた石がひゅーつと飛んで來たからたまりません、雀等はびつくり仰天。さあ大變!と一度にはらへつと飛去で仕舞ひましたが、見ると跡に一羽の雀が腰

骨を太かに打ち折られまして、翼をばた／＼させながら、飛ばうとしては落ち、立たうとしては倒れ、大相苦しんで居りました。

處へ、それを見付けたのか、一羽の鷹が庭の上でぐる／＼廻りながら、今にも飛下りさうにして居ますので爺さんは

『おーかわゆそー! 今獲られる!』

と大急ぎに駆けつけ、大切に手に載せまして、
「おーかわゆそー!」と言ひながら、池の傍へ行つて水を飲ませ、御醫者様のよゝに腰を撫でさすつて、孫供と一所に其れを少さい箱に入れました日が暮れると戸を閉めて眠させ、夜が明けると戸を開けて、又水のをませ米に菜等をそへてやりました。

さて又其の隣家に、意地悪の婆さんがあります

て之を見つたものですから

『此家の爺さん等はつまらない事なざる一年を

取つた癖に小兒見たよーな小鳥飼なんかを、其れも美しい鳥ならだが、見るのも否な不具雀ぢやないか。妾等なら疾くに引剥いて焼鳥だ。いやな事〜』

など、大變な惡口で笑ひました。笑はれても惡まれても爺さんは少しも關いません。日増にかわゆがつて到頭一月許経ました。

雀も段々とよくなりまして、最早跳び歩けるやうになりました。で毎日、心の中で、爺さんの親切で命を拾ひ、怪我までも直して貰つた事をひどく嬉しく思つて居る様子でありました。

何か用事でも有つて、爺さんが他處に行く時は、家の孫供によく言付けまして、

『この雀を見てくれ、忘れずに水や米などやつてくれ』

など、言つて置くものですから、孫供もこんな事をして、隣家の婆さんに笑はれるがとは思ひましたけれども、如何にも雀がかわゆそーにいいいと思はれるので、爺さんの命通りに飼ひました。それで雀も最早飛び立てる程に直りましたから爺さんは情しそーな顔で、今はも一鷹にも獲られはしまいからといふので、箱の中から出して、掌上に立たせて飛べるだらうかと、ずーつと手を差し伸ばして見たからたまりません。ふら／＼と雀は往つて仕舞ひました。孫供は

『あれー爺さんは、飛ばしてしまつて……』
と可憐しそーに見て居りますと、爺さんも自分で逃しはしたものの、此の間中明けても暮れて

もこの雀で心配をし、かわゆがつて來たのですから、茫然として

『あゝ飛んだく……又來るだらう』

と如何にも力が落ちた氣の抜けたよゝな聲で言ひました。處へ丁度隣家の婆さんが参りまして、之を見ましたから『間抜け爺が』といふ風で

『あんな鳥に逃げられて、あんな顔をする。早く食つてでも仕舞へば可いんだ。善い氣味な』と又笑ひながら、悪口をたゝきました。

（その二）

其れから十日許經て、此の爺さんの居間の軒先で、ちゅーくちゅーとどひどく雀の鳴く聲がしましたので、

『さあ來たのだらう。あの雀のやうな聲だと』獨言して、出て見た處が案の條、其の雀であり

ましたので、

『あゝかわゆそーに忘れずに來た！かわゆい事とさも可懷しそーに見て居ました處が、雀も爺さんの顔をつくぐぐと打ちながめて居たよゝでありましたが、其の口から少さい白い物を落して置いたよゝで、すーつと飛んで往つて仕舞ひました』

『何だらう！落しておいた物は』

と爺さんは其處へ行つて見た處が、夕顔の種が只一つ落ちて有つたのでありました。わざく持つて來た様子が何となく子細あるらしいと思ひまして、其れを掌上に拾ひ上げて、見返し／＼打ち眺めて居りました。

すると又丁度其處に、隣家の婆さんが見て居まして、

『馬鹿／＼しい事！雀に何か貰つて其を賣のや』

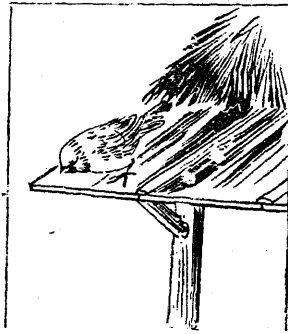
「いになさる、あは、
い、い、い」

と大口に笑ひました
爺さんは無頓着に眞面目な顔で、

「これを植ゑてみよ

一ぞ」と庭先の畠に植ゑました

それが芽を出しまして、夫れから葉も出、蔓も伸びました花も咲いて畠一杯になりました。出来た夕顔の大きさと云つたら、實に常々の物とは違つて、大きくなつたともく見た人で不思議にしない人は無つたのです。爺さんの悦びは一通りでありません。毎日く之を見て楽しみにしました。それで段々に自家でも採つて食べ、隣家の人達にも食はせ、採つてもくも盡きません、夫れから



爺さんは孫供に言ひ付けまして、たびく籠に入れて全村の家々に配らせました。夫れでもくく食べきれないので大きいのが十許のこりました。それは瓢に爲やうといふので、家の中に吊下げて置く事になりました。

さて暫く経つたので、瓢もしつかり堅



くなり、色も變つて何如にも立派に出来たよーだから、まづ一々夫れを卸して見よーとした處が、何だか少し重い様でありました。これは怪しいこれは變だと思ひながら、皆下して仕舞ひまして、扱其の一つを開けて見ました處が、何だか細かい種のよーな物が一杯入つて居るのです。何だらうかその他の入れ物に移して見ましたのに、何でせう其れが全然白米なので、出るともく限りも果もなく出て來るので爺さんは思ひがけないこの様にびつくりしまして大聲に子供をよんで見せると

『まあ大變、常事でない、雀のした事だ!』と手を叩いて皆大喜びでありました。

残りの瓢も、皆同じよーに重いのでまりあしたから、爺さんの喜びは、譬へる物も無いよーで、『まあこの瓢の白米は何時食べ盡れることたら

う

と言つたそーであります

下(その二)

この事を聞いた人達は誰でも爺さんのよい仕合を羨まない者は無かつたのであります。中でも隣の婆さんは中々慾深の方でありまして、又其家の子息も餘程婆さんの根性に似て居りましたから、二人して毎日美しいくと言ひ暮して居りました。或る日の事、この子息は婆さんに向つて

『隣家の爺様などは本統に美しい事だねー、同じ人間の事だから、家のお婆さん何か出来そーなものぢやないか』

と恨みらしい事を申しましたから、元來一意地有つて居る婆さんは、何か考へたとみえ、返辭も爲すすぐにこの爺さんの處にやつて参りました、

「婆、まあ今度は大相な事だそーで、眞にどーも御めでたう……雀にといふ事は一寸聞きましたが一体何如いふ事なのかねー」

「爺、お前様も知らしやるだらう、彼の雀がね、夕顔の種を一つ落したのを私が拾つて植ゑて出来たのさ」

「婆、そればかりぢやありません、其の雀は一体どーしたのだつたねー」

「爺さんは、匿す程の事でもないからと思つて」

「爺、なーにあの、子供が投げた石に當つて、腰を折つた雀があつたのを、私が助けて飼つてやつて其れをね、そら……御前様も知つてる筈だ。飛ばしてやつたさ。其れから後で持つて来てくれた種で、あの瓢が出来たのさ」

「婆、成程、然うかねー、……其の夕顔の種を妾に

「一つ下さらぬか」

「爺、所がね！眞に氣の毒だが、米になつた位の夕顔だから、種は無かつたのさ」

「と言はれて婆さんも仕方がなく、しばらくと歸つて来て、自分も何如にかして、腰折れ雀を見付けて飼つてやらうと思ひ込んで、目を圓くして家の周圍を見廻はして居ましたけれども、腰折れ雀は一つも見當りませんでした。」

「或る朝早く起きまして、屋後の方を窺つた處が米の散つた所に雀が澤山集つて跳ねて居ました。婆さんは「占めた」と小石を拾つて二つ三つぱらくつと投げ付けました。多くの雀の事でそれから頭飛べないのが出来て一羽苦んで居りました。婆さんはころ／＼と駆け寄りまして、棒でもつて尙一つ腰を打つて、夫れから水や米、菜などを呉

れなどして箱の中に入れまして、『もーこれで隣家の爺様のよいになれる。か併しこれ一つでは一だけの利徳だ。尙多かつたら夫れこそ大相な利徳だらう。あの爺様にも勝つて人々をも羨ませる譯だ』と考へましたから、

又家の周圍に米をまいて置いて窺つて居りますと、雀等は何も知らないから、集つて来て食つて居りますと、婆さんは又一羽の腰を折つて、箱に入れました。夫れで二羽になりましたが、婆さんは未だ飽き足りないで又々前の様にして一羽捕りました。都合三羽箱に入れて飼ふ事になつたのであります。

一月許で皆なをりまして、飛び跳ねられるよになりましてから、婆さんも大喜びで、夫々箱の外に出しましたから、雀はふら／＼と飛んで仕舞

ひました。婆さんは息子と一所に

『これで善い、甘い事をした

と喜んで居りました。けれども雀等は故意に腰を打ち折られて、あの様な窮屈な處に久しく押し籠められたのを、忌々しい事に思つて飛び去つたのであります。

（その二）

暫く過ぎて、この雀等が來ましたから、婆さんはまづ其の口に何かはへて居るかと思つた處が、矢張夕顔の種を一つ宛落して往きました。『此れこそだ』と嬉しくつて、早速三處に植ゑました。

其れが例よりは早くする／＼つと成長しまして出來たとも／＼大きくつて／＼魂消る程の大きさになりました。婆さんは獨り大恐悦で、子息に向

ひまして、

『汝は大した事は出来ないと言つたよーだつたが、如何だ、これでは隣家の爺様にも負けはすまい』

と大威張でありましたが、子息も成程と思つて黙つて居りました。

で婆さんは數が爺さんのより少ない様だといふので、皆米をとらふと考へて、他人にもやらず、自分も食はずに居りました。すると子息が

『隣家の爺様は、村の人達にも分けたら、自分でも食べたりしました。家のは三つの種だから少しは他人にも食べさせたら如何です』

と言ふので、婆さんも道理の事と思つたとみにまして、隣家近所の人達にも少しづつ配り、自分も子息と一所に食べました。

さあ大變。苦くつてく其の苦さ加減は何も比べる物はない。御藥の苦いのも、よもや此れにはと思はれる程でありました。

食べたといふ食べた人達、如何した譯か、食べた物は皆吐き出しまして、中には苦しいく狂ひまはつた人もありました。で其れ等の人達は皆身軀を悪くしまして。婆さんの處に集つて來まして、

『これく何といふ夕顔だ、怖い事く、一寸口につけた許で我れ等は吐きもどしの苦しみに遇つた。婆様居たか』

と大腹立で口々に怒鳴つて参りました。

處が此方も大變。婆さんも子息も各自に半死半生の態で食べた物は皆吐き散らし、拳を握つて苦しんで居りました大勢も驚き呆れて歸つて仕舞ひ

ました。

二三日経て、やうく婆さん等の気分もなをつたので、婆さんは、

妾が皆米に爲よーとしたのを汝が急いで食ふ事にしたから、飛んだ災難にあつた残り
はもー決して食べまいぞ』
と子息に話して、皆取つて吊
しました。

扱暫く経てから、見ると色も大分變つて來たから、もう口開を爲やうといふので、子息には米を入れる爲に大きな箱や桶を持ち込ませ、自分は吊してある瓢を



『重いぞ、中々重い大したものだ』
と言ひながら、皆下して仕舞ひました、嬉しいもの

のですから、齒も無い口して、耳のもつまで、獨笑み
擲がけで瓢を抱へ、首尾よく口を開けました。

米とは思ひの外、蟬、蜂、蜈蚣、蜥蜴、毒蛇、ぶん／＼等ひよろ／＼ぶ／＼

のろ／＼出掛けた出かけた限りも果てもなく出て來まして、目でも鼻でも、足でも手でも、婆さんと子供に取りついて、噛んだり刺したりしました、婆さんは痛さ何も分らなくな

つたのか、只米がこぼれると思つて

『待て／＼雀さん、少しづゝ拾ふから』

と言ひながら、毒虫の中を這ひ廻つて居る内に、他の瓢からも同じ毒虫どもが出て來た／＼子息は一生懸命、手を刺され、足を噛ぢられ、狂ひ狂つて爺さんの隣家に逃込みましたけれども婆さん一人は到頭其處で盲目にされ、手も足も利かぬ不具者となつたと申します。

これといふのも全く慾深意地惡の報い、譬にもいふ『身から出た錆』で、何とも致方はありません爺さんの方は之と天地でしたから、家内繁昌無病息災で、楽しい月日を送つたと申ししますのも、當然の次第でありませう。めでたし／＼。

(をばり)

●懸賞問答

やまとの翁

二十六

- (一) 山が多いのに山なし(梨縣とは、これ如何。
- (二) 外に在つてもうちわ(團扇)とは、これ如何。
- (三) 田の東にあつてもたにし(田螺)とは、これ如何。
- (四) さゝない魚をさしみとは、これ如何。

● 切期限 本月十五日までに到着の中で撰ぶ

● 解答は封書に限る 封紙には婦人と子とも投稿と御記し下さい

● 女子高等師範學校附屬幼稚園内フレル會宛
● 當撰は甘く出來たのを三等までとす。披露は第十號本誌上で、前號のと同時に

さて、第八號の解答は、いや奇々妙々、大分集つて來たのであるが、殘念な事には、編輯係りの方

の都合とやらで、本號に載せる事が出来ぬわい。
たいし、御褒美の品だけは確に當人たちへ遣はし
ましたぞ。

(やまとの翁)

次のを當てる人だーれ(これには御褒美なし)

●六を二分して(我國の名)



家庭



幼児の友達

ふみ子

今こゝに友達と申しますのは、普通にいふ遊び
友達ばかりの意味ではありませんで、大人でも、
老人でも、多くの時間、幼児に接する人のことで
ございます。

友達、これは幼児でも、大人でも、男でも、女
でも、極々大切なもので良いことも、わるいこと
も、其友達から受ける影響は非常なものでござ

ます。中には、よい感化をうけて、ますます、其の品性を高めつゝある人もあり、また、いつの間にか、おそろしい悪い方に入つて居る様な人もあります、其實例は世の中には、まことに、澤山ありまして、誰しも、よく、承知して居ることであります。そこで、私も今、こゝに、其わるい方の影響に付て記して見ようとおもひます。

一体、幼児が家庭に於て友達といたします人は其家庭の種類により、また、境遇により色々ありますが、中等以上の家庭では、召使を、幼児の相手として置くのが澤山あります。其召使の中にも色々ございまして、十六七才から、二十才位の人、只、おもりとして、また、かつきとして相手をして居るのもあります。また、三十前後から五十位の人、乳母として、すべて、世話して居

るのもあります。これ等は、重に、其幼児につききりにして居るのでありますが、其他下女や、小間使の様なものが世話して居るのもあります、そこで、これ等の境遇の子供が、普通、陥り易い弊害は、どうであるかと申しますと、非常に、我儘で、すべて、何事も我意の如くにあるものであると考へて居ることであります。これは、召使の人達が、主人に心服せず、従て、幼児に對して、愛情を持つて居ないで、意地悪いあたり方をいたします場合には、また、ほかの悪影響があります。これは、とりのけといたしまして、普通の召使は幼児のいふがまゝに事へます、一も二もなく、幼児の慾望をみたしてやりまゝ、尙進んでは、幼児は、まだ、一言もいはぬ先に、已に、其意を迎へて、事をいたします。そして、これは、幼児に

つかへて、忠なる道といたして居ります。獨り、召使が、思ふばかりではありません、主人の方でも、左様、考へて居らるゝのが多いかも知れません。勿論、主人に事へるのには、さう ありたいものでございますが、幼児其物には、快して、召使をつかふ力のあるものではありませんから、幼兒を世話して居る召使も、矢張 兩親の召使であります、幼兒其ものに、召使をつかふ力のないことは、貴賤貧富をとはず同一であります。成人した後こそ、使ふ力のある人もない人もありますが幼兒の時は、即ち、いづれも、幼兒で、家が富んで居るから、召使をつかふ力があるとか、貧しいから、ないとかいふわけのものではないと思ひます、而して、取扱方によつて、かはり易い、頑固でない幼兒は、わか意ふまゝになるにまかせて、

だん／＼不當な要求をしはじめます、また、無理な注文もいたしてまゐります、そこで、幼兒を世話して居る人達が 適當に、禁止し、訓誡することが出来れば、幼兒のためには、大へん、仕合でございますが、斯様な召使は、甚だ、稀に、見ることが出来るので、幼兒の生れた初から、責任を持つて、世話して居る乳母さへも、其幼兒をしつけることは六ヶ敷いことでございます。まして、普通の召使には、到底、其方に及びません。ために、幼兒が、色々のよくない影響を受けることは申すまでもありません。しかし、よく／＼考へて見ますれば、召使などには、無教育の人が多いのでございますから、これ等は、自然の結果でございます。

また、今申しましたのは、少し ちがひます

が年とつた祖父さんや、祖母さんを友達にして居る幼児だちもあります。老人と申すものは、とかく愛に弱れ易いもので、其上身心共に衰へて居りますから、老人に世話された幼児は所謂としより兒とか 申しまして 我儘で 柔弱で、不活潑で 何となく、幼児らしくない思想を持つて居るものが多いといふことは、誰も、よく 承知して居ります。

一体、下等社會では、特別に、幼児のために、相手になつて居る人はありませんで、多く、放任して置きますから、まへに申した二つの場合で前者は、上流社會の家庭に、後者は、中流社會の家庭にありがちのことでございます。そこで、斯様な場合に、十分、父母のよい感化が及ぶことが出来れば、さほど悪影響を受けませんが、上流

社會では 幼児は朝夕、辛うして、其父の顔を拜するのみ、これによれば 幼児と兩親とは 起臥の時間が異り、また、部屋が異て居るために、數日相見ざることすらあり、母の方は紡問、應接なとに忙かしいのもあり、さなくて、終日、家にゐる人も、一切、幼児の教育にたづさはらぬ人もあります。又中流社會では 父は業務に忙はしく、母は家事の整理に多忙で、意ならずも、老人に幼児を托するのがありますから、斯様の境遇に居る幼児は、父母の直接の感化は、大に減して居るのが、澤山あります。

そこで、私は、これ等を救ふのに、同様な權力を持つて居る友達を持たせることがよいと思ひます。しかし、友達にも色々ありますから、無暗に、作つてはなりません、よく／＼注意して撰み

ませんと、かへつてない方が、遙に、まさつて居る様になりますから、とくに、友を作らぬ様にして居る方のあるのは、これも、一の主義でありす。けれども、普通以上の友達を得ることが出来るといえますそれは、相互に遊嬉して居ります間に幼児は、自然の制裁を受けます。同じ様な権力の幼児同志が遊んで居りますと、快して我が意を通りばかりも振舞ふことは出来ません。例へは、ここに、一の玩具があるといえます。自分獨りなれば、いつも、獨りで 占領して居ることが出来ず。けれども、他に友達があれば、そう、獨りで占領して居ることは出来ません。斯様な處からだん／＼我意を抑へるべき場合のあることを知りておひきまして、我儘が小さくなります。若しこれが、めしたの者の幼児で、何事も、我意に従て

居る様な友達では、何の効もありませんで、害になります。斯様な點から、兄弟と共に遊ぶことの出来る幼児は仕合でこさいです。其他同年齡の幼児と遊ぶことは、幼児自然の状態をあらはして、活動することが出来ますから、老人ぢみる患はありません。従て老人ばかりを友達として居る時ほど、柔弱に陥ることもありません。

前に申した召使や、老人に對しては 外に、色々のしかたもありませうが、いま、申した友達を作るといふことは、與へて良い自然の良境遇であるとおひきます。しかしよく／＼注意に注意を加ふべきことは、よい友達を撰むことでございます

救急處置

醫學士 長瀬復三郎

救急處置といふのは其字の示す如く、卒然に急患者の出來た時、又は不意に負傷人のあつた時、又は平生病氣の人が急に發作を起した場合などに醫者の療治を受ける迄に臨時適當の手當をして患者を救ひ、又醫者の治療上にも妨げのない様にすること、其救急處置をする場合は種々あります

人事不省。これは非常の驚愕、恐怖、突然の腦貧血及充血、中毒、心臟の突然の衰弱、等の場合に起るもので、其有様は顔面が蒼白となり、又時としては赤くなり、目をつり上げ、足もと不確で精神が朦朧となり、外氣の刺激に感ずることが出來ぬのであります。此の場合には先づ患者を靜かな所に移して、室内であれば窓戸を開いて新鮮な空氣を流通させ、次に患者の衣帶を解いて身体の上部を呈はして呼吸を樂にし、又冷水を顔面に吹

さかけ、又皮膚を摩擦して上半部の血行を盛にさせるのであります。而して人事不省となつた場合に、顔色の蒼白なものと赤いものとあります。蒼白なのは腦貧血、赤いのは腦充血でありますから、腦貧血の時は枕を低くし、腦充血の時は枕を高くして冷すのであります。又呼吸のせまつた時はアンモニア水ホータン、ハツカ水などを鼻の中にいれて、刺激によつて呼吸を催すのであります。此の人事不省は時としては二三日も経くことがあります。これは醫者の部分に屬する事で、救急處置としてすべきことは呼吸と血行を盛にする様にとつとむることです。斯様にして氣の付きたる上は葡萄酒、茶、珈琲等を用ゐて心臟の作用を盛にし神經を鋭敏にすることが大切であります。こゝに注意すべきことは小兒の癲癇の時であります。

す。此の時は稀には舌を蔽ひ恐れがありますから
 余程氣を付けなければなりません。又無人の場處
 にて小兒の癲癇發作は火傷創傷を受ける事かある
 甚だ注意を要し升。この時は只靜に休ませて置い
 て目醒めた後に興奮劑を與へるのでございます。
 出血の甚しい時には虚脱の有様に進むことかわ
 ります。これは小兒に少くて大人に多いことで、
 大出血、大手術、及出産などした後に起るのであ
 ります。顔色は蒼白となり、手足は冷却し、脈搏
 も呼吸も弱くなります。此の時は能く皮膚を摩擦
 して、興奮劑を與へ、出血をとめて、醫者の來
 るのを待つのでございます。
 又驚愕、恐怖等でなく窒息のために人事不省と
 なる事があります。小兒のデブデブリアにかゝつた
 時又小兒大人共喉頭に腫物の出來た時には呼吸を

妨けられ、自己の炭酸中毒のために人事不省とな
 り、精神昏朦の有様に陥ることがあります。此の
 時は速に醫の手を待たなければなりません。又病
 氣のためでなく、火事の時に烟にまかれ、土、雪
 水の中に埋められ或は溺れて窒息することかわり
 ます。又小さな室に炭火を盛に燃やして、多人數
 の集つて居る時に室内に出來る有毒なる瓦斯のた
 めに窒息することがあります。又炭酸瓦斯の中毒
 は深井の中で起ることもあり。この場合に窒息
 者を救ひ出す人は余程注意しなければなりません。
 直に其の深井に飛び込むとは危険であります。
 よく風を送り、其上で、燭燭に火を點して其深井
 の中にさし入れ、其火の消否を見て火の消えぬ様
 になつて初めて入らなければなりません。又室内
 で突然炭酸瓦斯中毒のものが出來た時には、直に

他の室に移さなければなりません。水に溺れ、烟にまかれて卒倒した場合には其人を水又は烟の中から取出した後直に人工呼吸法を行はなければなりません。水に溺れた人は溺死後一時間程の内なれば之を救ふことが出来ます。即ち斯様な場合に逢ひました時はまづ第一に溺死者を仰臥せしめ、平手を胸に押し、潤れた布で胸を打ち、之をうつむけにして胃部を壓して水を吐かせます。次に人工呼吸法を行ひ尚蘇生せぬ場合には興奮剤を用ゐます。又縊死した場合には其縊死して居る儘で其縊死に用ゐた紐を切り去つてはなりません。必ず誰か其人を抱き支へなから紐を切り、後人工呼吸法を行ふのでございます

(未完)

昔今 いろは料理

石井泰次郎

三十四

(む)

むし茄子の拵方

なすびを洗ひて、丸ながら紙に包みて、水に浸して、火の中の炭の内に埋めて、蒸焼にして、能く焼たるを計りて、取出し、其まゝ水にとりて、紙を去りて、へたを切りさりて、たてにさきて、生醤油、酒すこしを加へて煮かへしたるを冷して、茄子にかけて食すべし、わり蕃椒を其汁の中にまぜてよし

眉毛餃の拵へ方

これは支那料理のこしらへ方なり、まづ白玉粉を湯にてこねて、大がた鹽煎餅ぐらゐに丸くして、成たけうすくのぼし、この内に乾海老のよろしき

を酒にひたして二分位に切りたると、竹の子推茸などを一分角に切りたるを共にあちをつけて、包みて、二つに折合すれば、半月形即ち眉毛の如くなるなり、故に眉毛餃とはいふなり

紫とうふ拵方

豆腐を布に包みて、かたくしぼりて、すりばちにて搗て、器にとりて、別に紫蘇の葉をこま／＼に切りて、搗盆にてすりたるを合せて、口紅を少し入れて豆腐ともにすり合せて、紙に包むか、又程よく丸めて、蒸籠に竹の皮を敷たる上にじかに置いて、湯にたてたる鍋の上にかけてむすべし

蒸いもの拵方

甘藷能く洗ひて、鹽湯又は潮を煮立て蒸籠でむす

幼児の腹當

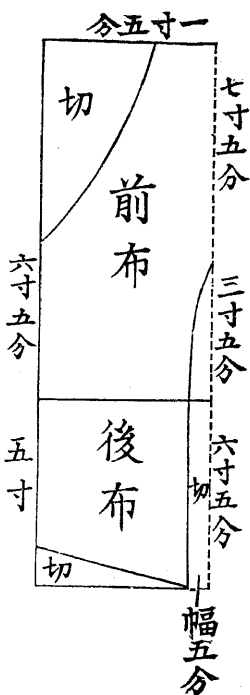
岡本 ちか

幼児は土用の如き最も暑き日にても決して腹部を冷してはなりません、下痢症などは是から起るものとが澤山ございます、殊に夜分はもし蒲團をぬぎても腹部の冷えぬ様に腹當をさせて置くことが肝腰でありますから、爰に其の極めて簡便なるもの、裁方縫方の一二を記しませう。

切は木綿幅長さ一尺七寸五分のものを表裏と紐とが入用であります、紐は幅二寸五分位長さ一尺八寸のものと長さ一尺位のもの二本とが入用であります。

第一紐を衿け置きて後の切の「イ」「ロ」の所にはさみて「ハイホ」「ニロへ」の所と左右の裾口とを表裏合せて縫ひ之を表に返して縫製を致します。

第二の方の切の「イロ」「ハニ」の所と左右の裾口と股の所を裾より二寸五分位のこし置き其あと、を表裏合せて縫ひ表に返して縫袂を致します。
第三前布を以て、後布を挟みて脇の所と股の所と一裁方



第一圖

を四つ縫にして、次にあごの所に紐をつけるのでございます。
又九寸四方位の切表裏と紐の切と別に三寸五分四方位のものとかさりの切少しばかりとにて三圖の如きものを作ることが出来ます。是は極めて簡便

第二圖

出来上りの圖

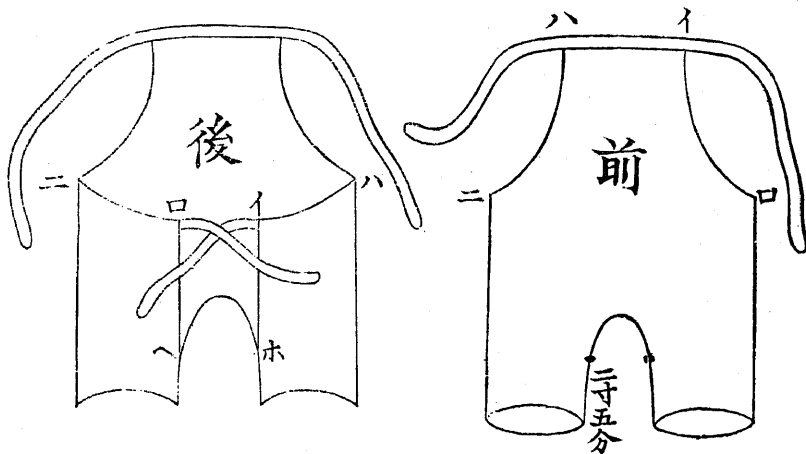


圖 四 第

寸 三

如きものも縫ふことが出来ず。

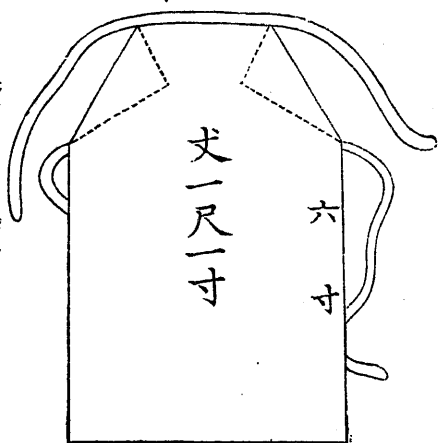
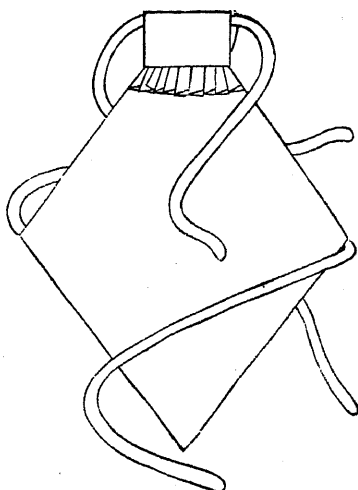


圖 三 第



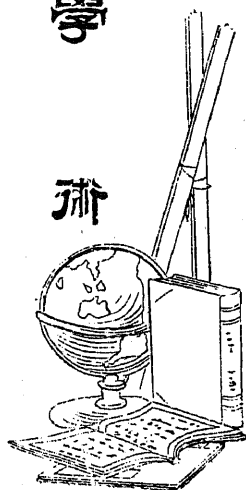
圖のて四と紐もの位の一寸一尺長さ綿幅又木す。りまであ

眼の 話 (二)

本 郷 生

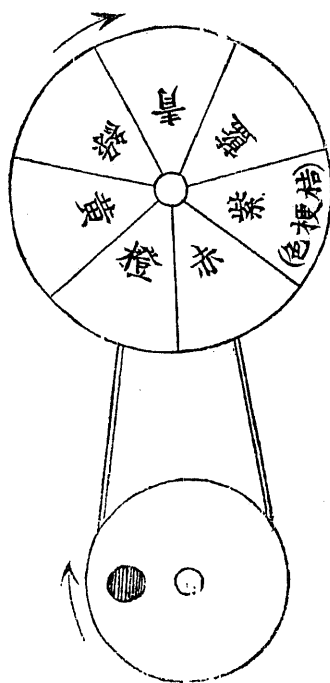
學

術



次に、網膜の一性質として吾等の考へて見たこととは、視覚の繼續とでも申すべきことで、吾等の網膜は光を送る原因が去つても其感じのみは暫く繼續して居ると云ふことです、よく子供の時分、篠や梢の尖きを火でやいて赤い炭となしたものを手速く動かし動かして其れが光りの輪をなすを見て楽しみとし、度々叱られたことがあるが、之れは

線香なぞをともして試むれば誰でも見らるゝこと
で、而して其理由は光源の動くにつれて、其網膜
の像も動く、而も早く動くが爲め、最初の感じ
が未だ消へ失せぬ先きに、はや次ぎ次ぎの感じが



來りて、つまり順々に位置を異にせる像が同時に
感ずることになるもの故、光りの輪を見ること
になるので、此性質を利用してニュートンは七色
板なるものをつくり、その實驗によりて、虹の

如き美しき各種の色が集りて、通常の白色になる
ことを證據立てました。七色板とは一ツの盆の如
き圓板を虹の中の主なる七色、即ち紅橙黄緑青
藍紫に染め分け、其中心を軸として速かに回轉
する裝置であります。今之れを注視する人

三十八

があるとして、其人の網膜上の一點に如何
なることが起るかと申しまするに、そこ
は先づ一ツの色、例へば赤き色が表はれま
すると、其紅の感じが、まだ消え失せぬ先
き他の橙色が表はれ來り、此二色の感じ
が消え失せぬ中に、又他の色が來り（七色
板が速かに回轉する故）其上に又々他の色が來る
と云ふやうにして、つまり其點は七色を全時に感
ずるに至ります。七色を同時に感ずる結果は實驗
によりますれば其盤が白色に見ゆると云ふことに

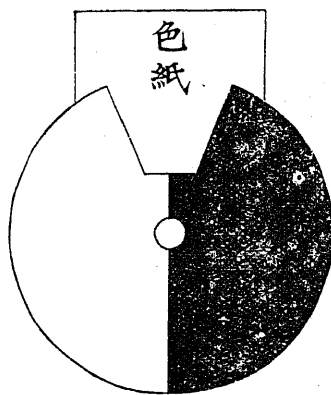
なりますからニュートン氏は之れを以て通常の白色と云ふものは、もと各種の色の混合であるけれども之れ等が同時に眼中に入り來り、同時に網膜を刺激するため白色に見ゆるものであると云ふ證據にしたものであります。吾等は茲に至りて色てふものに就て話して見たく思ふ念が切であります、今は眼の研究が主眼ですから之れは預りにしませう。

視覺の繼續を利用したるもので、一寸面白きは彼の活動寫眞、及び勸工場等に賣らるゝ之れも活動寫眞の眞似方なる活動畫等であります。此等の理由は前のことを了解したる人には、決して分り難きことではないと思ひます。

しても一ツ、網膜の他の性質、即ち視覺の疲勞と云ふことに就て話して見たいのであります。

吾等が体操でも、其他の運動でもなすときに當て同じ所作のみを續けますと非常に疲勞しますと同様に、網膜も同様の刺激にのみあひますと、疲れて其感じが鈍くなります。而して此れが爲めに、吾々は種々の現象に出遇ふものであります。最も手近なる例は太陽とか、ランプとか、光のつよきものを見た後で直ちに他のものを見ますときは、殆んど眼のさかないことがあります。之れには瞳孔の縮小てふ原因もありますが、一つには強き光りに刺激せられて網膜が感じを鈍くしたるためもあります。霹靂一聲頭上に轟くと全時に目も眩する程に一閃の電光が天の一角を擘くを見ることは、夏のはか雨には稀ならぬことであります。此時其電光の消え去るや否やそれと全じ形をして而かも黒色のものが現はれたのを見たと云ふ人

が、古來其例に乏しくありませぬ。で、古へのは之れを黒き電光と言ひましたが、之れは黒き電光でもなんでもなく、やはり網膜の疲勞と云ふことで十分説明し得らるゝことであります。一見光り強き電光に打たれて疲勞したる網膜の部分は、どんよりとした灰色の空色ぐらひの送り越す光線には感じないのであります。否感じないではありませんが、他の疲れざる部分が之を感じる度に比すれば、極めて弱きものであります。故にそこが黒く見ゆるのであります、白地の衣を着て人の顔は一層の黒さを加へ、萬綠叢中の紅は一入の紅を覺ゆる道理で、色の對比は實に黒き電光を見せるのであります。近頃時事新報が或る外國雜誌より轉載したりとて報道したる色に關する實驗は、やはり全様に説明し得らるゝことで頗る面白い。圖



き板の黒と白とに半分わけに塗りたるものの、其色の境を圖の如く切り去り、其後に色紙をかき、圓板の中心に筆の軸の如きものを貫きて、之れを廻はしつゝ、前の色紙を（之れは動さずに

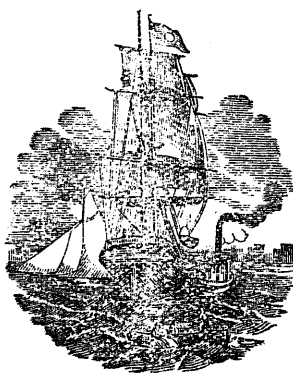
四十

く）注視するの
であります、此
實驗に於て注意
すべき箇條は、
第一、成るべく明
るきところに於
てすること、第
二、回轉の速度を
程よくすること等（實際試みれば其程より程度を
知る事易し）であります。然るときは、色紙の色
はもとのものと變りたる色、即ち光學上に云ふ餘

色と云ふものが見えます。即ちもとの色が赤ければ緑青色に見え、桔梗色なれば黄綠色に、黄なれば青く、青ければ黄に見ゆるのであります。今其理由を説明して見ますならば、先づ黒き部分が赤色の紙を蔽ひ居る場合より始めて考へずするならば、眼は赤紙を見んとしますけれど黒き板にさへざられて眼には少しも光りが入り来らない、網膜には光の刺激がない、従て此時、網膜は休息して居る、今圓板が回轉して赤色が見ゆるやうになりますれば、休息したる網膜は強く赤色に感ずるところが出来ます、然るに圓板が回轉を續け、暫くして赤が白の爲めに蔽はるゝ場合になりますと、既に赤色に刺激せられたる網膜は、亦に對する感じを弱くして居りますから、集て白色をなすところの各種の色の内にて、赤を感ずることが弱く、其

他の色を感じることが強くあります、故に此時、眼は白きものを見たと感じずに、白色の内より赤色のみを抜き去りたる餘の色を見たと感じます。餘色とは即ち之れであります、かく考へ来りますれば赤は依然たる赤なれども、之れを見る眼が普通の有様にあらざれば、赤は赤として見られず、黄は黄として見られないのであります、世に其例尠からざる一種の盲人即ち色盲は其網膜が赤緑桔梗の内の一色に感ずる力が全く欠けてあるが爲めと申します。此等の人の目に映ずる此世界は其色の点より申しますれば如何に吾等の見るところと異りたるところが大きくありませう、更に思へば吾等の如き舌を有するものには唐辛は辛く感ずれども、之れを食ふ蟲の舌を以てすれば、これは甘露も蜜ならざる味を有するものかも知れない、吾れ

等の目と鼻と耳と口とが今の目と鼻と耳と口との
如くにあらざれば、天地は全然異りたるものとし
て吾人に對するであるー(ついで)



朝
も
秋

夕も秋の

あつまかな

史傳

黒澤登幾子

下村三四吉



四十二

本年一月の本誌 第二卷第一號に、余は津崎矩
子の傳を記述し始め、その冠首に、「……望東尼
と相比すべきもの更に二人あり。その一人は京都
の津崎矩子にして、他の一人は常陸の黒澤登幾子
なり、京都を中央として、一は西國に在り、一は
關東に出でたり、亦奇とすべし。この二人の事蹟
は、その曲折もとより各同じからずといへども、
勤王の志に至りては則ち一なり。既に望東尼を傳

したる上は、他の二人をも説かざるへからず。よ
りて、ここには、先づ津崎矩子の事蹟を述べ、然
る後残れる一人に及び、余が記述の本意を始終せ
んと欲す。」といへり。矩子の傳も亦先々月の誌上
にて終結せり。本題の黒澤登幾女は、即ち余が記
述の約を果すべき「残れる一人」なりけり。

登幾子は修驗者黒澤莊三郎の女にて文化三年十
二月、常陸國東茨城郡錫高野村に生れぬ。方には
れ水戸藩近世の大英物藤田東湖の生れしと同年な
り。そも、修驗者といふは、修驗道を修むる
もの、名稱なり。修驗道は、もと佛教の一派にて
宇多天皇の寛平年中に歿しける醍醐の僧聖寶の創
めたるところにして、加持祈禱を行ひ、また神に
も事ふるわざをもなし、佛教神道の兩方に關係せ
るものなり、その徒は、半ば頭髮を剃りたるし、

篠掛、袈裟、頭巾を着け、大刀を帶び、金剛杖を
つき、法螺を吹きて、山河を跋渉し、露宿の苦を
嘗めて修行す、よりて亦山伏とも云ふ。かゝれば
修驗者たるものは、大かた、ひとわたりの讀み書
きの道に通じ、中には學問に深きものも少なから
ざりき。登幾子の父たる莊三郎につきては、吾人
不幸にして、その詳しき事蹟を知るに由なく、且
つ登幾子のまだ幼き間に歿しければ、登幾子の彼
れより受けし感化は、割合に少なかりしならんと
思はる。母なる人の素性に關しても、ここに語る
べき材料を得ざれども、その確固たる志操を有せ
る人なりしことは、なほ後文にあらはれぬべし。
莊三郎の歿してより兩三年の後、寡居の母は、
同村の新介といふものを迎へて入夫となしぬ。新
介は人となり氣節を尙び、志操あり、また學問を

好み、村内の子弟を聚めて之を教授せり。登幾子も家庭によりて、繼父の薫陶を受け、國學を修め最も和歌に長ぜり。登幾子が後來に於ける尊王憂國の思想操持は、この間に涵養せられたるもの、蓋し極めて大なるべし。

吾人は、更に登幾子の郷里たる錫高野村につきて注意せざるべからず。同村は、水戸の西北に在りて、水戸徳川家の藩封に屬せり。水戸藩にては所謂水戸學なるものあり、水戸學の精神は、倫道を明かにし名分を正しふするに在り。光國公修史事業を始められてより、尊王の大義は、ここに發揮せられ、近くは藤田幽谷(東湖の父)同東湖、及び會澤正志等之を繼紹論述して、天下の志士を鼓舞作興しけり。明治維新の大業の發動は、實にこの水戸學の力に存せりといふべし。光國公また

封内の節婦孝女を旌賞すること一にして足らず、その奨勵せるところ見るに足れり。水戸の風尙の影響は、海内を風靡せり、ましてその封内に屬せるもの、豈その感化を受けずして止みなんや。敏慧の素質を有せる登幾子は、新介の誘掖によりて學業日に進みしが、彼が年頃に達せるに及びて、繼父は亦重き病にかゝりて、他界の人となり。懇に葬送を修め、ほど經て、媒灼する人ありて、同國久慈郡小島村の鴨志田彦藏といふに嫁しぬ。子三人までまうけたりしが、數年の後、更に夫の死歿の憂さめにあひぬ。よりて、その幼女を携えて、里方に歸り、七十に近き實母の孝養に怠りなかりき。

(つづく)

荷明ニ大義ニ正ニ人心、皇道奚患レ不ニ興起、

斯心奮發誓神明

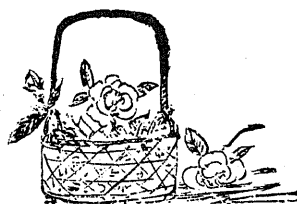
古人有云鑿而已

(藤田東湖)

梓弓春のあそびのたはふれも

踏みなたがへそものふの道

(同 右)



文苑

暴風

赤堀信成

野分せしあさちか中にこほろぎの

あはれなくなり細聲にして

山崎房吉

地の上に咲きしあさ顔いかばかり

恐ろしかりし夜半の野分は

増山三雪子

柿の實のいろつく頃し野わさして

枝を空しく打ちてけるかな

小幡八重子

時のまに軒端のまつはたふれけり

いかに嵐のはげしかりけん

曉水鶏

東久世通禧

賤の男のかけまだ見へぬさ苗田の

ありわけ月夜水鶏なくらん

水野忠敬

ありわけの月は残れるねやの戸に

夢おどろかし水鶏なくなり

増山正治

わけつぐる八聲の鶏をきかぬまに

何思ひてかたゝくくひなぞ

諏訪忠元

挿櫛のあかつきがたになりぬとや

門を水鶏のたゝくなるらん

相澤朧

挿櫛のあかつきおきのすゝしきに

水鶏の聲も身にぞしみぬる

矢田猪平

夢をさへ結ぶまもなきみじかよに

あかつきかけて水鶏なくなり

大橋文之

短夜もはやわけんとすしぼの戸を

わけよと叩く水鶏なるらん

西升子

涼しさを袖におぼゆるねやの戸の

かしわけ方に水鶏なくなり

増山三雪子

さめやらぬねやの枕のあかつきに

おどろかしても鳴く水鶏哉

頭本春子

いとしく叩く水鶏におき出てゝ

見れば門田も白みそめけり

久保花子

川水のながれのすゑもほの見えて

ありわけ月に水鶏なくなり

柴生田たつ子

有明のつきかけきよきさと川に

明るもしらで水鶏なくなり

大竹伊勢子

夜は明ぬとく明よとて門の戸を

水鶏はいたく叩くなるらん

印 東 昌 綱

ともし火のはかげも白む明方に

水鶏の聲ぞちかくきこゆる

佐々木信綱

うばらさく里の垣根も見初めて

明行く小田に水鶏なくなり

鈴 虫

ろ す い

燈火消え、坪にもたらぬ中庭に、たゞずめりけり、

下宿の下婢、田舎育ちのいやしき風情にも、何や

ら、ものおもひげなりけり、

「なにしてや

「山里ならぬ都の住ひ、夏のあつさをすいむし

の、こゝにも聲の、聞ゆるぞかし

「鈴虫の聲、何とさくや

「うらめしく

「などてうらめしくは

「田舎の事、思ひ出して

「田舎といふは

「君、知り玉はずや、甲州、あの、吉田の里を

……

「吉田に父ありや

「否なとよ、五年むかしに

「愛の母ありや

「去年の霜月、あえなくも……

「さあらは誰を……戀しとてにや……可愛

の夫を……

「オホ、ツ

と笑ひて、厠の蔭に、姿かくしき、』

濱邊の五分間

濱 子

同じ五分時間でも都大路の五分間、海上の五分、山中の五分、晝間の五分、夜間の五分、田舎の五分、瀛車中の五分、家の中の五分、皆見る物聞く物感ずる事がちがひませう。私はひとつ濱邊の五分の涼しさを記させよう。

時は明治三十五年の八月十一日の午前五時五分より同十分に至る五分間、處は安房國勝山の濱邊人は四五日前に都から來た私でございます。

私は今、濱邊の眞際にある小山の上で、とある松の木に倚りて海原に面して立つて居る。多くの漁夫は濱邊に、多くの漁船は岸近く沖遠くもはや今日のなりはひをはじめて居る。遙に白帆が三四見える。一直線にきつぱりとひかれた水平線の上を眼を定めて見れば三浦半島と城ヶ島が僅にそれと見える。後の山からはうれしくも朝日が木の間

四十八

からかゝやき出して、私の脊を照らし、又岸近き四五の小舟の片側をあかるく照らして居る。廣々とした海原は、人の心は廣かれ、と言つて居るやうである。大浪小浪は靜に濱の汀に寄せてはかへり、山の下の方岩に激しては高く低く白い清い水烟となつて上て居る。私はとうとう山を下りて水に突き出た岩の上に立つた。浪の烟はともすれば私の裾に雨をふらす。漁船の數は何時の間にか増して居る。左に見ゆる浮島はいつもかはらず突兀と海中に立つて居る。晴天には正面に見ゆると聞いた富士山、今日は雲立ちこめて姿をかくして居る城ヶ島のあの邊にあの神々しい山は見ゆるのであらうか。磯の松風はそよ／＼と私をなでゝ居る。朝日は全く後の山をはなれた。私の影は前に長く岩の上に臥して居る。

此靜かな自然に包まれた私、耳に入るものとはうちよする浪の音ばかり、さもなくしてさへ涼し

い清い心持のよい濱邊の、しかも夏の朝の五分間
はどんなに私の心を洗ひましたでせうか。

暑中休暇

楓

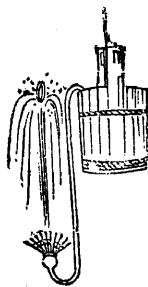
學生が學屋の疲れをば夏の休みにぞ補はるゝ、
まして公の試に有らん限りの腦力と身軀とを費し
漸く許されて行李早々勇みて歸る古郷の我家、い
とも樂しき事ぞかし。

住馴れし家はありし其まゝ笑みて迎へ給へる父母
同胞喜びて右左よりありし事共物語る、父は愛で
給ふ幅物を出し此は誰か筆、此は何など、其貴を
語り給ひ、母は待ち受にて紙布の織物など見せ
給ふ、弟は怪げなる片假名にて「クシベニ」など書
ける清書を出してはこる、見るもの聞くものと
して樂しからぬはなし、三伏の暑さも樂しき家の
まゝとゐに忘れ、朝な夕なのそゝろありきには弟妹

を打つれ浪打ぎわの貝拾ひ露しげき夏草をあさり
己がまゝなる自然の樂しみ限りなし、雪に螢に一
歳の辛酸もわはれこの樂しみに打たれて夢に過
ぎ行く今日幾日、休みの日きりも残りすくなにな
り、又も母をいそがせて、旅立の用意行李を調へ
て便船のあるがまゝに立ち出づめり。

うからやからは波止場に立ちて安らけく又の遇
ふ日を期して別れを惜しむ様もいとうれし。

こたびは歸省の前と異りて、肉づき顔色もつや
／＼と身のうち凡て新らしくなりてもとの學屋へ
とかへり、己がじゝ務むるなりけり實に夏の休み
こそ我等學生にとりてはいとも／＼大事の賜物ぞ
かし。



説林

本邦古代保育法の一斑(ついで)

下村三四吉



以上申し述べましたのは、鷓鴣草葺不合尊の時
の例ですが、なほ一二の例を申しませう。垂仁天
皇の御世に、皇后狹穗媛が御兄狹穗彦の叛逆の事
に關りて、稻城に立てこもり、官兵に攻め圍まれ
たまへる折に、皇后品遲別皇子を生ませたまひ、
皇子は官兵に渡させられましたが、その際、天皇
より皇后に、如何にして皇子を日足しまつらんと

五十

の御尋ねがありまして、その御答を、古事記に記
して、「御母を取り、大湯坐若湯坐を定めて日足し
まつるべしと申したまひき」とあります。この
「御母」につきて、本居宣長翁は、古事記傳に於い
て、「御母は美淤毛と訓べし、乳母を云なり、淤毛
と云は、兒を養育する婦人を凡てしか稱ふ
なり、其中に乳母は、殊に主とある者なる故に、
唯に淤毛とのみ云なり、又親母も、主と養育する
なる故に、淤毛とも云り、云々」と解しておられ
る。これでこの「御母」は、即ち前に申した「乳
母」(ちちも)と同じものであることがわかる、湯
坐も前と同じものであつて、大と若との區別あ
るは、大小と申すのと異なるないのです。
さて又、應仁天皇のとき、尻調根命の三人の妹が
皇妃にわがり、合せて十三皇子を生み奉りました

が、これについて、尻調根命におはせられて、諸皇子を日足し奉らしめられ、その子若日子連并に妹の毛良比賣を湯坐の役に定められたことが見えております。この尻調根命の役目は即ち皇子の御養育主任とも申すべきものです。また湯坐の役目は婦人に限らず、男子も勤めましたことはここに挙げた記事でわかりませう。その方の主任者は、後には却て男子であるのに定まつてゐるやうです。

右の外にも、皇子方の御養育について、御用を承はるものをお定になつた事柄は、所々に見えて居りますが、同じやうなものですから、略します。すべて我が國上古の風として、官職業務などは、多くは世襲致しましたが、皇子方の御養育につきましても、おひくにその御用を預かる役目の者

の組が出来るやうになりました。それを總稱して「みぶべ」と申しまして、文字では壬生部と書いてあります。この言葉の意味は能く解りませぬが、「み」は御にて敬語、「ぶ」は産衣、産聲、産屋など申す「うぶ」の省約語でありませう。尤もこれは一寸私の考へつきであつて、定つた説と申すわけではござりませぬ。「べ」は「部」の字に當り、「くみ」の意味です。そうならば、「みぶべ」は「御生部」或は「御産部」の字をあててのがよろしかろう。即ち皇子方の御産所に奉仕して御養育に關する職務をつとめるもの、團體を申すのであつたと考へられる。

(ついで)

現今の幼稚園保育法につきて

東 基吉

現今本邦に於て、幼稚園事業に最も力を盡しつゝある一外國婦人と、嘗て斯道につきて語りたることありし時、余は幼稚園恩物の使用法に付き、かくくの新しい方法を採用しては如何、と陳べたりしに對して、婦人は『併しフレーベル氏の使用法によりて悉く幼児に弄ばしめんには、決してさる新奇の方法を採用する時間とはあるまじ』と答へられたることありき。此一言實に我國に於ても外國に於ても、婦人の……幼稚園に従事せる婦人の一況保守的傾向を代表せる好個の一例といふべし。よし幼児に取りて如何に興味深く、如何に自然的に、如何に教育的なりとも、尊ぶべき祖師の述べられたるものにあらざる以上は採用する

に及ばずといふなり。これ抑々、祖師に忠ならんと欲して、會々以て祖師の効績を滅却するものにあらざして何ぞや。

現今の幼稚園保育法は、保育者の不幸なる此傾向により、或は教育上の知識の殆んど缺乏せる年少無知の保育者の手によりて、幾多諸般の進歩に對して最後に位せるが如し。其結果たるや則ち知れるものは此點を捕へて、知らざるものは彌次馬的に口を揃へて幼稚園其ものまでも無用の長物視せんとす。保姆の養保育法の改良は實に幼稚園のため、否可憐なる我が幼児のために、最大急務といはざるべからず。

現行法令によれば、一幼稚園に收容すべき幼児の定員五十名、一保姆の擔任すべき幼児數四十名一日の保育時數五時間以外、保姆は女子にして尋

常小學校教員、若しくは准教員の資格を有するものより取り、左の日課によりて幼児を保育すべしとするものなり。

一、遊戲、二、談話、三、唱歌、四、手技。

遊戲は之を別ちて、共同遊戲及隨意遊戲の二とす。共同遊戲とは通例謂はゆる遊戲と稱するものにして、即多數の幼児を集め、遊戲室に於て、樂器に合はせて遊戲せしむるものにして、隨意遊戲とは幼兒をして各自隨意的に、自然的に、或は保育室に於て、或は運動場に於て、思ひ思ひに悠々遊樂せしむるものをいふ。談話は多くは修身の話にして、時々庶物の話を合せ用ふ。唱歌は即唱歌にして、手技は幼稚園恩物を用ゐるなり。

多數の幼稚園に於ては、之等の日課は一日五時間(食事時間を含む)を三十分づゝに別ちて配當せ

り。則八時より三十分の間唱歌せしむれば、次の三十分即ち九時までは遊戲次の冊分は手技、次は談話といふが如し。かくて一人の保姆が四十人乃至五十人の幼児を集めて保育するなり。

遊戲、談話、唱歌、手技とは皆幼兒活動の發表の形式にして最も幼兒自然の本能より出づる嗜好に屬す。従つて之等の活動を利用して保育せば、則ち善良なる習慣の形成と強健なる身軀の發達とは、當然收むべき結果として顯はるゝは最も明白なれども、さりとて總べて他の場合と同じく、其方法にして誤るあらんか、之と反對に有害の結果を來たすことも亦明なりとす。

今此等各課につきて聊か、現時の保育法を批評せんか。所謂共同遊戲に於ては、常に最も多く唱歌と伴はしむるものなり。換言すれば唱歌しなが

ら、其意味を遊戲に於て顯はさしむるものにして
 通例の幼稚園に於ては遊戲室を備へ、此處に於て
 風琴若しくは洋琴を用ゐて行ふものとす。こゝに
 吾人が此遊戲に於て注意すべき點は、どこまでも
 遊戲的性質を失はざらしむることとなり。詳に云
 へば此遊戲をなすに當り、幼兒をして何處までも
 遊戲として感ぜしむべく決して仕事として感ぜし
 むべからざることとなり、尙一層詳言すれば之を
 なすに當りては、幼兒はよく其歌の意味と遊戲の
 意味とを聯結して知了し、彼等の心は滿腔の喜を
 以て司配せられ、其注意は此一點に集中せられ、
 彼等の顔面は此喜を以て輝き渡り、彼等の身軀は
 自ら活潑に、輕快に、動作するを禁ずる能はざる
 様ならざるべからず。由來幼兒は男女にかゝはら
 ず、輕快にして活潑なり。即ち遊戲も常に幼兒の此

傾向に投ぜざるべからず、余は或幼稚園に於て高
 尚なる唱歌に附するに復雜緩慢なる舞の手の如き
 ものを以てしたる遊戲を見たり、保姆一人合點し
 て肝心の幼兒は全く無意味に、殆んど機械的に動
 作す。此の如き遊戲は其真正の生命を失へるもの
 といふべし。はた又行進の形を以て顯はるゝ多數
 の遊戲に於ても彼等が、小さき歩并揃へて樂器に
 併はせつゝ秩序正しく、規律的に種々の形を模す
 るを何て、保姆は巧に彼等の遊戲を指導し遂げた
 りと速了する事もあらんか、併しながら元來舞蹈
 の初歩の如き規律的動作の調和を樂しむ心意は、
 頗る發達したるものならざるべからず。幼兒心意
 の發達力の盛なる、大抵の事は教ふるまゝに行ふ
 を得べしといへども、此の如き遊戲に於ては、心
 ある者まさにフレーベル氏の言ひけん、遊戲の眞

精神たる幼兒内心の自發的活動の表出甚だ僅少なるを認知すべし。

是に於て此時代に於ける幼兒遊戲の眞正の價值は、寧ろ反つて彼等の隨意遊戲に於て多く存するを見るなり。但し此場合にありては、幼兒の遊戲上必要なる凡百の自然的需用を以て具備せられたる園地の設あることを豫量せざるべからず。此如き園地は幼稚園に於て、最も缺くべからざる要素にして、風琴の如き、洋琴の如き、机腰掛の如き、黑板の如き、要は即要なりといふを得べけんも、到底缺くべからざる要素にわらず。廣濶なる遊戲場の一方には、自然の樹木蒨鬱として、夏は則天の炎熱を覆ひて綠陰深き邊、清流の消々として掬すべきあり、春は則ち四邊の草花は自然の錦を織りなせるあり、彼方には丘陵嶺ち、此方には砂原

あり、一言すれば凡そ出來べき丈けの自然地理的現象の備具せられたる、此の如き遊戲場こそ必要缺くべからざる要素なれ。幼兒はこゝ於て三々五五悠悠として、或は樹間に歌ふ小鳥を、友として共に歌ふべく、或は平野に驅くる家畜を友として共に馳騁すべし、自然の恩物は限りなく彼等供せられ意の儘に此處に弄ぶことを許さる、此の如くにして、こそ彼等は眞に自然の子として自然の恩恵に浴することを得べく、此の如き境界に於ける所謂隨意遊戲の價值にはまた何人も否むこと能はざるべし。

此の如き見解を以て現今幼稚園の多數を見んか、殆んど猫額も管ならざる空地に無數の幼兒を逐ひ込み、或は全く空地を有せずして形ばかりの教場用具を備へ、併も學校衛生の範圍外に逸出せる

幽暗不潔の一室に彼等を幽閉し、放縱、喧噪、亂暴、狼藉に之れ一任し、而して敢て隨意遊戲の時間なりといふ。滑稽の度を過ぎて吾は寧ろ幼兒の爲めに哭せんと欲す。

(未完)



水と陸との境

海

川口孫治郎

水の陸地に入込みたる處

浦、松林、茅屋、鹽焼く煙、漁船、漁網、さて

は漁火のゆら／＼とあるは欸乃の遠く聞ゆる

磯、波うち際に岩石の立ち並びて、漁翁の岩陰

より釣を垂れたる、鵜の斜に水に翔けり入る

濱、平なる砂上に貝拾ふ童、潮淺き邊に海氣浴

を試むる人々、

港、深く入り込みて、底深く、大舶小舟の輻湊

せる、所謂文化の傳播の門戸たるもの。



水に陸地の突出でたる處。

岬、崎ともいふ、岩石、怒濤、直に聯想し來り

往々存する燈臺は、暗夜、海の悲劇喜劇を想起せしむ。

水に圍まれたる小なる陸地、

島嶼、碧水に點々せる群島、絶海の波濤を拔き

出でたる孤島など、

陸と陸との間の水、

内海と海峡、潮流、暗礁、渦卷、亦以て理學者

文學者以外に於ても趣味ある問題、

陸を全く離れし沖、

灘、潮の早き、海の最も豪壯なる處、

洋、山なす洪濤の澎湃たる、海の最も雄大なる

ところ、

海上の觀察、夕やけ、朝やけの雲の模様、飛翔す

る海鳥の趣、水天髣髴の際西と東とに白帆黒帆

片帆、真帆など、

海底の觀察、地勢は如何に、産物の經濟上の關係

は如何に、暗黒界に於ける限なき活劇は如何に

更に麗はしき珊瑚は何處に伸ぶ、悼むしき白

骨は何處に横はる、など、

海面の觀察、海面の趣味は、波濤に在り、波濤の

趣は、變化に在り、漣漪としては、少女の微笑

の如く、狂瀾としては、霸王の赫怒の如く、斷嚴

に掩聲して轟然雪城を築さしそれは、時として、

砂上に戯れて喃喃として頑童の踵を濯ひ、照々と

して輕舟をゆるがせしそれは、時として、黒煙天

を焦して奮進する幾萬噸の鐵艦を、秋の木の葉の

一片よりも尙ほ淺ましく翻弄す。

夜はほの／＼とわけ行きて立ち昇りたる霧の漸

く霽れつ、鮮かなる旭にうたれて、光輝燦爛たる

春の海に對すれば、自ら優麗閑雅の感起り、

夕陽西に傾きて煙斂まり雲消えつ、さし出づる

月の光に照されて碧すみ渡る秋の海に對すれば、

何とはなしに清秀靜穩の心浮び、

脫然として九天の頂にうちかけたる大浪の、轟

然として奈落の底をえぐり來り、奔然として巨巖

に爆裂し、轟々として相呼應する夏の海に對すれ

は、誰かは雄大豪宕と慨起せざるべき。

颶風咆哮し、天地晦冥の時、船をも人をも、盡

く激浪怒濤の中に吞噬し果さんとする冬の海に對

すれば凄壯慘憺の感起らざるものそれ何人がある

げに、靜觀すれば愈々變萬化倏忽遂に把握

すべからざるが如きは、海の表面なり、

毎一日に潮汐の交代あり、毎一月に更に大なる

潮汐あり、毎一年に二回の大潮汐の更に大なるも

のあり、而かも如上の變化は今日、明日、今月、

今年、來年、又來年、波濤の變化は變化として、

未來永劫に渡りて、依然として變化す、是に於て

か、吾人々類は、智と情との上に海の影響を受く

るのみに止まらず、幽玄極みなき永劫の意的感情

の自らら養はるゝものあるなり。

東京市養育院を觀る

ひさ子

一口に花の都と言へば、いかにも花のやうにさ

こえますが、同じ東京でも、實際は、土地と住む

人に由りて、なるほど花のやうな處もあれば、開

くだけでも寒くなるやうな處もあり、實にあはれ

な處もあり、ふもしろい處もあり、又まるで暗黒

世界に生活して居る人、貧の底に沈んで居る人、頼るべくなくて世を憂いものと嘆いて居る人、世にもあはれな孤兒も居りませう。又之等のかわいそうな人達を救て、限りなき恵を與へて居る光明の世界もございませう。

小石川の宮坂を上つて、ズーッと真直に行きますと、段々静かな處になります、大塚辻町まで行くと、右側に、東京市養育院といふ札のかゝつた一萬二千餘坪あるといふ大層廣い一構があります。こゝはたしかに花の都の内の一の別世界であつて、又光明の世界で、其内部をくはしく見れば見るほど、考へれば考ふるほど、一種の感じのする場所であります。私は七月の末に或日こゝを參觀いたしました、もはや御覧になつた方も澤山でございませうけれども、まだ御覧にならない方

の爲に、少し其中の事を御紹介いたしませう。此院は孤兒及窮民を救育する處で、其入院規則の大要中に左の通りにあります。

本院ハ孤兒及窮民ヲ救育スル所ニシテ孤兒ハ別ニ願書ヲ要セズ
區役所ニ申出テ同所ヨリ送付セラルトマデナリ
孤兒ニアラズ者ノ入院ハ本院長ニ願出テ許可ヲ受クルモノニシ
テ其入院資格ハ左ノゴトシ

一、二年以内市内ニ住居シ獨身ニテ癡疾不具心神精弱及老衰ノ爲生活ノデキヌ者

一、獨身デナクトモ病氣其他ノ事故ニ由リ一家生活ノデキヌ者
一、重傷ヲ受ケ頼ル所ナキ者

之で大抵どんな人達が此院内に生活して居るかといふことが推せられますが、其人數は七百八十九人で、なほくはしく言へば、窮民が二百七十三人、行旅病人が二百四十七人、棄兒が百六十五人、孤兒が四十八人、迷兒が八人、感化生が四十八人ですが、窮民の内、幼弱者が五十八人、行旅病人の中で、幼弱者が四十六人なるこの事です

から、子供が三百七十三人、大人が四百十六人であります。

で、此外に三才未満で院外の里親の家に預けてあるのが七十八人あるそうでございます。つまり此養育院のおかげで毎日を送る人が、合計七百九十八人あることになりました。

まづ私は大きな門を入り、玄關に上つて、事務所を右に見て應接所に入りました、少時すると一人の方が出て来られましたして詳しく案内の勞をとつて下さいました。それで私は此方に從つて、

幼童室 幼稚園 醫局 男病室 食堂
 幼稚園 小學校 幼童工場 感化部
 女健康室 女病室 幼童病室
 男健康室 浴室 炊事場

などを見ました。之等は皆廊下でつゞいて居る一の構であつて、之等とは離れて次のやうな處が別

々に建て居ります。即ち

家庭教場 洗濯場 隔離室 癩病者室
 炭園場 園丁住宅 肺病者室 物置
 米庫 工作場 會堂、佛殿 入院者診療所
 土藏 役宅

等でございます。

●幼童室、幼稚園、幼女室 何れもまだ幼い子

供であります、温い慈愛深い保母を、母のやうに思つて、何も知らずがほに嬉々として戯れて居ります、何處へ行ても幼児は幼児、どんな兒でも幼児は幼児ですから、今こそ養育院の、かげで無邪氣に遊んで温かい良き空氣の中に育つては居りますが、どれも之も、入院するまでには、少からぬうき世の浪風にわたつたものである、冷かな人の心の爲に、或は棄てられ、或は遺され、或は迷うて居つたものである、と思ひますと、此幼児

●幼稚園
こゝでは、三四十人の幼児がチャンと腰をかけて、先生の御話を聞いて居りました。

●小學校

之(これ)は前(まへ)には簡易(かんい)な課程(かてい)の小學校(せうがくこう)であ

つたそうですが、今では文部省規定の小學程度で
讀本習字帖なども東京市各小學校と同一のものを
採用して居るといふことでございます。私の觀
した時には、習字の處も讀本の處もいろいろで
ございました。

●●●●●
●感化部　こゝは、悪化あくかの虞おそれのある者もの、又は已まだに悪化あくかした者もの(共に満八才以上十六才未満さいじゅうまん)を入れ

る處で、幾多の罪惡を未然に防ぎ、又末恐しい惡少年を矯正する處で、かういふ事業が世に必要であることは言ふまでもない話ですが、私はこの事に付て詳しく伺ひました。けれどもあまり長くなりませんから、此部の事は次號にでも記すことにいたしませう。

●女健康室 健康と申した處が、癘疾、不具、

心神耗弱、老衰などの人達ですから、普通の活氣があらう筈がございません。皆、一種の淋しい顔をして居ります。私は前の幼兒の室に入つた時とは又ちがつた感を起しました。あれは、此院で生長して將來世に出でようとするもの、之は又、普通の世に獨力で住むことができないために、此院内に餘生を送るもの、即ち此院は此人達の死すべき場所である、と思へばいかにもあはれな氣の毒な

情が起りました、併し此院の救を受けなかつたならば、此人達はとくに此世を去つて居つたでございませう。

●女病室 此室に居る病人の中に、此室に病に

臥してから十年になるといふのが一人、八年になるといふのが一人ございました。食時には食事をして、あとは寢て居るばかりであると申しますが一体何が楽しいでせう、と傍の人にたづねましたらば、食べる事です、と答へられました。なるほどかういふ境遇になれば、何も外に希望といふものはないかもしれぬ、ア、實に世は様々であると感じました。

●幼童病室 一兒一兒、寢臺の上に安臥して看護婦の温かい情の下に眠つて居ります。病室ですからいづれも青白い者、瘡せた者ばかりですが、

寢臺には、之は棄兒であるとか、遺兒であるとか、
 札が立てあります。父母の名も顔も知らぬ幼兒の
 病に臥して居る顔がいかにあはれであると共に
 是等を我子のやうにいつくしんで、看病して居ら
 れる方々の同情は實にうるはしいものでございま
 す。

●男病室

普通ならば屈強であるべき男が此院
 に入院するさへあるのに、まして病に臥して居る
 様子は實に氣の毒です。

併し、あとで幹事の方から伺つた御話に由ります
 と、幼兒で此院に入るものは、大抵自分が悪いの
 でなく、大方は父母の爲に、こゝで養はれなければ
 ならぬやうな境遇に陥るのですが、大人であつ
 て此院に来るものは止むを得ずして窮境に陥たも
 のもあるが、自業自得で、自分の心得が悪いから

人の世話になるやうになる者も、少くないこの事
 です。して見ると男健康室、男病室、女健康室、
 女病室に居る人達は、何れもかなしい歴史か
 そろしい歴史かを持て居るのであつて、無教育の
 結果といふのが随分ございませう。

●家庭教場

此院に居る兒童は、世間に接す
 ことが少い爲に、自然に世間の事情に暗く、且つ
 大組織の集合舎に起臥して普通家庭の状況を知
 る機会がないといふ、ことを考へられた結果、教
 育上、又快樂を與へて自然の感化を及ぼすといふ
 上から、今から三年ほど前に設けられたさうです
 其教場は、院の附屬小學校運動場の一隅に、一家
 屋を別に建て、垣を圍らし小門小庭園がある。庭
 の中には玄關も座敷も臺所もある。こゝには一人
 の女教師の方が住んで居られて、普通家庭實際の

事を教へられるので、普通學校授業が終ると、十

歳以上の童女は交代にこゝに來て、洒掃、應對、

進退、炊事を實地に習ふので、之と同時に毎日各

室から學齡以上の童兒十人づゝを交番に賓客とし

て招待し、其日に製したものを饗し、且つ之に禮

節を教へられるとの事でございます。

養育院が東京市中の一の別世界ならば、こゝは又

養育院中の別世界でございませう。

此家庭教場は意外の良効があつて、一般童兒に一

の快樂を與ふると共に、禮節を學ばしめ、家庭の

有様を習得させることができます、殊に感化部生に

對して効力の著しいのを感ずる、といふ御話で

ございまして。

●會堂及佛殿 こゝは門を入ると左側に見ゆる

大廣間で、教誨師の法話、又はいろゝの法會の

ある處でございませう。

私は右に記しました諸處を詳しく案内された後、

幹事の御方からいろゝ有益な御話を承りました

さまぐの感を抱いて歸宅いたしました。

八月と九月(はつきとながつ)

せ く 生

八月といへば、新曆では暑氣の絶頂でありませう

本年なども、所謂三伏の熱さの中伏末伏はこの月

でありまして、實に夏季中の眞夏とても申したい

時であります、舊曆では然様の暑さははや過ぎ

て、門田の稻葉打ちそよぐ秋風やうゝ立ちそめ

て、草木の綠稍々黄ばみかゝれば、空の綠のいや

まして、紺青ともいひつべきまでに冴えわたり、

陸奥の馬嘶く野邊は、一しは高い秋空に、何處よ

りともなく群れ来る雁は、みなみくと歸りながら、麗はしいたり穂の稻の田の面にあさるもありませう。

この月の名を古くから、「は月」と申しました。其の譯については實に色々の議論があります。

第一に「八月は木の葉紅葉ちて落ちる故に、葉落月といふをよこなまりにはつき」といふ」と釋解した人がありました。

第二に此の説を駁して別に論じた人があるのです。は月を草木の葉の散り初める故にいつたと説くは如何はしいことである、散初めるといへば、柳桐の類は七月の初秋に初めて、九月十月に散り果つるなれば、この月に限つて葉落月といふ事はなからう。月令に「八月白露節の後五日に候鴈来る」とあつて、この月初めて鴈の来るなれば、初

來月であるを「つき」といふ詞の二つ重なれば一つを略してはつきといふことは、「卯つ木月」を卯月といふと同じことである」といふ。

第三には又之とも違ふ説がある。はつきは稻葉月である。稻の葉が最茂る時であるから」といふ第四には「葉が茂るといふよりは、この月は穂の發り膨むとの著きなれば、「穂發月」であつて、其の詞の「穂」が落ちて「はり月」となり、其の「り」も到頭脱落しては月となつた」といふの ですが、如何にも之が正しいと領かれます。といふのも彼の「ふ月」な月」と共に秋の三月は皆稻に干係ある處から考へてゐあります。

初又この月の異名も中々ありました、大方は書紀に基いて居ます。

紅染月(有家朝臣)

時雨つゝはしの立枝も紅葉して

紅葉の月ふかきくれ

ふはなさ月(兼藝法師)

さりくすさはなさ月打わひて

浅茅か原に聲よはるなり

木染月(莫傳抄)

松を見て名をぞ忘るゝ木染月

露やひなしき色やつれなき

草津月(同)

色々に花咲いてこそしられけれ

草つ月とはけふあすの露

月見月(鴨長明)

名にしおはゝ秋の半の空晴れて

光ことなる月そ見る月

秋風月(定家卿)

萩の葉に露ふきみたす音よりや

身にしみそめし秋風の月

九月(ながつき)

秋もやうく深くなつて來まして、庭の紅葉に

は、薄いのもありますが、深山は最早まつ盛り、

二月の花よりも紅なりと時めくに、東籬の下、さ

びしげに隠君子を氣取る菊の花も、却々趣かわ

ります。

澄みにすんで居る大空は、晝間のみでなく、月

三更霜もかくべき夜、あはれに冴えて雁わたつた

折々には、壯夫さへ異域に在つては腸をたちませ

う。まして草群にすだく蟋蟀の聲々が、老をわび

不幸をかこつ種となる事は、如何ばかりでありま

せうか。

斯かる中にも、さも惜しさうに、鎌を研ぎ、縄

をなひ、牛を逐ひ馬を驅る農夫等の忙しぶりは、よそ目に見るさへ心地よい、楽しい此の月の特徴であります。

さて又此の九月を何故むかしは「なが月」と申したらうか。勿論初には誰いふとなく、然様に言ひ馴れて參つたのでありまして、歌などで、

夜晝の数は三十にあまらぬを

など長月といひ初めけん(躬恒)

秋ふかみ戀する人のあかしかね

夜を長つきといふにやあるらん

(忠岑)

凡河内大人と壬生ひじりとの研究が有つたくらゐでありましたが、鎌倉時代の末頃に「九月夜漸くながき故に夜長月といふを誤れり」(藤原元輔)と第一に説明を試みられました。處が第二番に徳

川時代になりましてこれに反對して、「稻は九月刈り納めるからして「伊奈我利月」の上下の伊と利とを落したのだ」(加茂真淵)と説きました。

第三番目には「稻熟月を訛りて言ふならんか」(宣長)と説き、第四番目には、又別に「一見識を立て、前の三説に反對したのがあります。それは「稻の穂が長いので「穗長月」といふのだ」(跡部光海)といふのであります。私はいかさま此の第四番が正しからうと思ひます。で此の九月の異名は、

いろとり月(菅原忠享)

常盤山いろどり月になりぬれば

錦をさらす心地こそすれ

菊開月 (莫傳抄)

こと草はうらかれはて、花もなし

菊咲月は花をこそみれ

紅葉月もみぢつき（同）

芳野山青根よしのみやしろが峰みねのもみぢ月つき

時雨しぐれ降り來てしられけるかな

紅葉月もみぢつき

たつた山やままなくしぐるゝ比ひとてや

紅葉もみぢの月つきの色いろをそふらん

小田刈月おでかりつき

さびしさは鳴たつくれの露つゆしけみ

袖打そでうちちはらふ小田刈おでかりの月つき

寢覺月ねざめつき（

いくたびかなし枕まくらの寢覺ねざめ月つき

秋あきにはたえぬ長ながき夜よすから

他たを批評ひひやうすることに付ひきて（其上）

野本生抄譯

人は兎角、輕くしく、他を批判し、爲めに、自己を誤り、又、人を傷つくること多し、一度、斯かる誤りを世に吹聴せんか、其は、一種の勢力を生じ、遂に抜くべからざるに至り、頓ては、世の善惡の標準を顛倒するに至るべし。人間の性情は、複雑にして極りなし。其の一小部分をも、猶能く、精細に批判すること、誰か、容易なりとせんや。而かも、其の容易ならざるを知るの人にして、幾何學の一形体、若しくは、一箇の花、若しくは、一片の雜草に對して、輕しく、其の性質を評説するを愧ぢ、却て、己が同胞に對して恰も、其のいふところに、強固なる證左の存するあるが如く、直に以つて己が憶測の批判を加ふるを常とするは、豈怪しむべきの至ならずや。

假令、吾人は、自ら、斯かる揣摩憶測を爲さず

とするも、其の相逢ふ人々の口より、其を喜び受け、且つ、固く、其の憶説を信ずるの傾向あり、是れ、輕しく、人を信ずるものといふべく、亦批難を免かるゝこと能はざるべし。斯かる傳説を信じて、其を、自己の口より出づるが如く、若くは又己れ、實際に、其を觀察せるが如くに装ひて、更らに是れを、他に吹聴するに至ては、其の危險、罪惡、是れより大なるはなかるべし。人、若し、己が名譽と信用を貸して、輕しく、他の批評に雷同附和して、妄りに、吹聴したる他人の惡評の多くは、其の原因の極めて微細にして、毫も取るに足らざることを知らば、必ずや、心中、慚愧に堪えざるべし。然れば、假令、信頼すべき強固なる道理の存するあるも、其を吹聴することを急ぐべからず、況や、其の事の、他に對する惡評非難な

るに於てをや。トーマス、アケンビス、嘗て、其著の一節に此種の格言を記せり、其言最も痛烈なり。曰く、

謹慎の一部は、他の言ふ所は何事も信ぜざるに在り、而して、又、汝の聞くところは更なり、汝の信するところをも、亦、他の耳に入るゝことを急ぐべからず。

人の性僻は、其の性格の外面にありて明なることあり。或は、其の行爲に於ける明白なる事實の上に顯るゝことあり。或は、又、衆人環視の場合に處すること多きが爲め、其の性僻を批判するの材料を供すること多き人あり。かゝる場合には、自ら、其の世評を慥むることをなさず、容易く、其の世評に感化せらるゝ人多し。然れば、如何なる場合に際しても、他の性僻行爲に關しては、一

般の世評に迷はざらんことを努めざるべからず。若し、人は是れに迷はれ、已れ亦、烏合の團體の一員となりて、其を助くるに過ぎざるなり。試に、此等、理性なき團體のいふところを聞け。彼等能く誠實に他の性辟を、充分に、論評することゝなすや。又人の行爲を評論するに當て、仔細に是れを討議して能く遺漏なきを得るや。彼等にして、若し、其の一部たりとも、誠實に論述するか、若しくは、又他の聰明にして公平なる人に對し、其の正しき論斷を爲すに、其の資料となるべき、指示、表言を與へんには猶、幸なり。而も、其の所説、其物は眞實なりとするも、徒らに、其を、誇大に吹聴するが爲めに、人を誤ること多きを如如せん。況んや其の論評の多くは、輕浮なる少數者の發意唱道に成れるに於てをや。

人は、單獨に、事物を批評することの謬り易きを惑る。然れど、輕々しく、世評を信じ、世論は多數の人々より成り、若しくは、成りたるが如くに見ゆるの故を以て、此種の誤り無しと思ふは、却て誤れり。我等、他人の性辟、行爲に關して、其の批評を聞くこと多し。然れど、若し、巨細に、其の評論を解剖し來れば、例令、其の評説するところは、眞摯なりとするも、其の多くは、事實探究の不完全なるが爲め、或は、推理の方法を誤れるにより全く、謬見、過誤に陷れるを見るべし。即ち單に批評者自身の僻見、感情、若しくは、唯、其の巧妙なる架空の想像に成れるものあり、或ひは、不完全なる、他の口供を信ずるより此處に到れるものあり。又、或は、其の聞き得たる事件の顛末に

通ぜずして、毫も、精細に、近き、報導をも爲し、能はざる者の傳説を信ずるより、此處に及びたるものあり、時としては、一般の談話に際し、何心なく、言ひ出でたることの、却て、熟考の餘に成りたるもの、如くに思ひ爲さるゝことあり、又、往々、此等種々なる原由の相合して成れるあり、而して、其の結果たるや、虚偽なる事實の陳述を基とし、彼等自らにも充分に理解し得ざる事情を妄信し、不當の方法の下に、他の性僻、行爲を論斷し去り、廣く、其を吹聴傳播し、結局、是れを、衆愚痴漢の自由に、誇張、傳播するに一任すに至るなり。」

も の 言 へ ば

く ち び る 寒 し

秋 の 風



●九重の御消息

●一兵卒の處罰を憫ませ玉ふ

先月十二日、朝

侍從 武官長岡澤中將より、近衛司令部副官を電

話にて召喚せられたるにより、何事ならんと深野

大尉は急ぎて参内したるに、本月二日、芝離宮へ

露國大公殿下御訪問のため、行幸ありたる砌り、

二重橋正門に歩哨したる兵卒の一人が、鹵簿に對

し奉り、畏憚の餘りに、敬禮の規矩を失し、處罰

せられ居ることを、今朝思し召し出させられ、憐

憫の大御心より、殊に宥免せよとの御沙汰ありた

る旨、侍從武官長より嚴かに傳達を受けたり、大尉は畏まりて司令部に還り、早速に宥免の手續に及びたる由なるが司令部にては大御心の一兵卒の身の上に及ぶことを語り傳へ、中には涙にむせぶ老士官もありたりといふ。

●淳宮初御參内 第二皇孫雍仁親王殿下には、先月十三日午前九時三十分青山御産所御出門十時賢所皇靈殿神殿に御玉串を奉り、御拜ありて御參内初めて 兩陛下に御對顔相成りたり 皇后陛下には殿下御誕生後、青山御所に行啓御對顔あらせらるべき筈なりしも、當時御假床中なりしを以て 天皇陛下と共に初めての御對顔なりければ一層御満悦斜ならざりし由に承はる、斯くて十一時五十分御歸殿あらせられたりといふ。

●學びの窓

●教員檢定試験日割

本年の師範學校、中學校高等女學校教員檢定試験豫備試験は、東京は文部省にて、地方は各府縣廳にて、日割左の如くなり

八月二十日 地理化學 受験者合計 八百八十五人
同 廿一日 日本史、東洋史、農業 同 四百六十三人
同 廿二日 西洋史、物理 同 二百三十一人
同 廿三日 國語、漢文、物理 同 五百八十一人
同 廿五日 國語、漢文、植物 同 七百八十六人
同 廿六日 動物、生理、家事 同 二百九十六人
同 廿七日 教育、礦物、裁縫 同 五百二十七人
同 廿八日 修身、普通、體操 同 三百九十八人
同 廿九日 英語、兵式體操 同 三百六十八人
同 三十日 代數、用器畫 同 七百八十三人
九月一日 幾何、毛筆畫 同 七百六十一人
同 二日 算術、鉛筆畫 同 七百〇三人
十月十八日 習字 同 三百六十八人

●學生の所罰統計

文部省の調査に係る明治三十四年四月より三十五年三月に至る、全國中學校高等女學校生徒の一學年間に處分を受けたる者の數

左の如しと

學者がくしや者四千八百五十三人、二年にん年入學志望者がくしや三千四百七十七人、内入學者うちに入がくしや二千二百五十九人、三學年入學志望者がくしや二千四百三十四人、内入學者うちに入がくしや千六百八十一人、四學年入學志望者がくしや二百九十七人、内入學者うちに入がくしや二百四十六人、五學年入學志望者がくしや百〇八人、内入學者うちに入がくしや六十六人なりと。

●日英女學生の通信交換 ● 日英同盟成立以來、英國婦人えいこくふじんにして日本婦人にほんふじんの眞情しんじやうを知悉ちしつせんとするの念ねん大に起りたる結果、同國皇立地理學院會員どうこくしやうりつちりチャード氏しやうどし及在留本邦人ざいりゅうほんぱうじん中川浩平氏等發起人ながわこうへいしとなり、英國皇后陛下えいこくこうしやうへいの校長かうちやうたる倫敦女子大學生ロンドンよしだいがくせい、外數十名そとにじゅうしやうの書簡しよかんを裁さいして各般かくはんの事情じやうじやうを具ぐし、遙はるかに日本女學生にっぽんふじやうせいの交際かうさいを求め來ることとなりし由よしにて、在神田ざいしんたの英學新報社えいがくしんぱうしやは専もつら之これが媒介者はいかいしやとして我女わがきよ學界がくかいを警醒けいせいし、英國女學生えいこくふじやうせいと通信つうしんを交換かうかんし情誼じやうぎを

ていつく 訂結するものを求むと云ふ。

●東京女學校 下谷東黒門町二二、なる同校は

本年六日中旬の開校にして、教科は本科、専攻科
受驗科、裁縫教員養成科等より成り、本科は高等
女學校と同一程度にして、専攻科は各學科を隨意
に撰修せしむるもの、又受驗科は女子高等師範、
女子大學入學者の爲に學力を補習せしむるものな
りと、總裁は鳥尾子爵にして、校長は元山形縣高
等女學校校長たりし折田重任氏なるが、教員は何れ
も、懇篤熱心に教授の勞に當り、殊に總裁鳥尾子
爵は本月より、自身毎月一回宛、臨校して生徒一
同に修身上の講話ある由、尙本月よりは更に寄宿
舎を開設して、地方遊學者の便宜に供する筈なり
と

●筆の字

●鳥島の大噴火

先月十八日横濱に着せし兵庫

丸は最も悲惨なる珍事を傳へたり。鳥島の噴火之
なり。此島は小笠原群島の一にして、八丈島を去
ること、南方約百六十海裡、周圍約三里の一孤島
にして、現今住民は百五十名、皆信天翁捕獲と
其糞の採集とに従事せり。其報告によれば、大噴
火は先月八日九日頃に爆發せしが如く、可憐の勞
働者は一切、生きながら焦熱地獄の苦を受けて
地中に埋没せられしが如く、山頂よりは絶えず黒
烟の噴出あり海岸崩壞海水暗澹其慘狀言語に盡
し難く實に悲慘を極めたりとの事なり。此報導に
接して同島地主玉置氏方には、至急探檢救済の準
備に着手せりしが、尙軍艦高千穂は、早急救助の
爲め航行せりといふ。

●西郷從道侯の薨去

元帥西郷從道侯は胃弱に

罹り、七月十八日黒の自邸にて薨去ありたり、
 侯危篤の事宮中に聞ゆるや 陛下は特に位一級を
 進めて従一位に叙せられ、二十二日には勅使とし
 て侍従を同邸に差遣され、左の 勅語を傳へしめ
 祭奏金五千圓及幣帛神饌等を下賜せられたり。
 風に尊王の大義を唱へて以て復古の宏議を賛け文武の要職に歷
 任して内外の機務を參畫し終に元帥の府に列す雅量重望久く國
 家の柱石たり今や溘亡す曷ぞ痛悼に勝へん茲に侍臣を遣し賜贈
 を齎して以て弔慰せしむ

同時に 皇后陛下より皇后亮を同邸に差遣はされ
 祭資金千圓を賜び、葬送の節は棺前へ玉串を供せ
 させられたりとそ 兩陛下か功臣を侍せらるゝ實
 に厚しといふべし。

●東京たより

聲 水 生

▲左なきだに 夏の東京は寂しさものなるに、ま

して、本夏の如き、土用中、晴天三日といふ、希
 有の時候に際會致し候て、一層の寂漠を感じ候。
 ▲たい先月十日、代議士の選舉の候て、聊か、寂
 漠を破り候のみ。

▲先月十日頃 諸所に出水の災害有之候由、東京
 市内にても、下町の所々は、同じ災難に出遭ひ候
 て、折から降り續きたる霖雨に、其職を失ひ、生
 活の途に究し候貧民は、一層の究境に迫られ候由
 太略は新聞紙の報する處に依りて、御承知の事と
 存じ候。

▲附近の海水浴場も、例年に比して、三分の一の
 浴客を集むるに困難致し候ひし由、たいし、こは
 不景氣といふ譯にていはなく候。何故かと申すに
 海水浴客などは、大方不景氣など申す事は、存ぜ
 ぬ方々のみ故に候。たい如何にも、天道様の御考

へ違^{ちが}ひにて、土用中綿入羽織^{とちゅうちゅうわたはき}を着^きせざるべからざるが如^{ごと}き寒氣^{かんき}に恐^{おそ}れ候故^{ゆゑ}に候。

▲たゞ本夏^{ほんか}に於^おける壯圖^{さうと}として、御報導^{ごほうどう}申^{まを}したきは、柳澤伯^{やなぎざわはく}の避暑航海^{ひしょくかい}に候、續賣新聞社^{よみうりしんぶん}の學生富士登山會^{がくせいふじとさんかい}に候、其他學生の大陸旅行^{たいりくりょこう}に出懸^{でか}けたる人々の多^{おほ}かりし事に候、のつたり、すつたりして温泉場^{おんせんば}や、海水浴場^{かいすいよくじょう}などで、空々寂々^{くうくわく}として日を過^すぐす學生、紳士の一考^{いっかう}すべき所に候

▲當年^{なうねん}の夏期講習會^{かきこうしゅうかい}は、何處^{どこ}とも不景氣^{ふけいき}に終^おり候由^{よし}、一般世間の不景氣^{ふけいき}の爲^{ため}でも候半^{はん}が、一は、余^{あま}り數多^{あまた}ありし故^{ゆゑ}とも存候^{ぞんかう}、早々^{はや}。

●地方通信

大阪通信

●大阪市保育會講習會

大阪市保育會にては、

本年夏季、女子高等師範學校教授兼主事^{はんなんかき、やましなうとし、はんがくけいけんしゅじ}中村五六^{なかつむら五六}君^{くん}の歸省^{きしやう}の途次^{とじ}、乞^こひて五日間保育^{にちかんはいく}の講義^{こうぎ}を聽^きくこととなり、七月十四日^{しちがつじゅうにち}より同市東區浪花幼稚園^{どうしひがしきななはなちようえん}内に開會^{かいかい}、當日^{なうじつ}は市保育會長^{しはいくわんちやう會長}大村芳樹^{おほむらよしき}開會^{かいかい}の辭^{こと}に次^つぎて中村講師^{なかつむらこうし}の挨拶^{あいさつ}あり、引續^{ひきつづ}きて五日間講習^{ごにちかんこうし}十八日午後四時^{じゅうはちにちごごし}一同着席修了式^{どうちやくせきしゅうりょうしき}を舉^あげ、大村會長^{おほむらかいでう}より講習員^{こうしじゅうゐん}百三十六名^{ひゃくさんじゅうろくめい}に證明書^{しやうめいじよ}を授與^{じゆゑ}し、講師^{こうし}の演說會員總代^{えんさくかいゐんそうだい}の謝辭^{しゃしき}等^らありて式^{しき}を終^おれり、講習會^{こうしじゅうかい}百三十六名^{ひゃくさんじゅうろくめい}中、京都^{きやうと}より四名、神戸市^{かふべし}より三名來^きりて入會^{にゅうかい}せしものあり講習中^{こうしじゅうちゆう}は一同熱心^{どういっしん}に聽講^{ちやうかう}し、豫^{かた}て抱懷^{ほうかい}せる疑問^{ぎもん}に對^{たい}し講義^{こうぎ}の説明^{せうめい}を得^えて頗^{すこ}る満足^{まんじつ}し、斯道^{しだう}には極^{きは}めて有益^{いうえき}なることにて、是^{これ}にて會員^{かいゐん}の研究心^{けんきゅうしん}を一層盛^{さうかん}ならしめたり。

(大村芳樹報)

香川通信 香川通信員

香川縣には現今四ヶ所に幼稚園あり、高松、坂出、丸龜、多度津にして其中坂出と丸龜とは第三回保姆練習科の卒業生主任となりて保育せらる、五月頃高松にて開かれし二府十六縣の共進會には各幼稚園より出品せり、中には面白い考案もありし由、高等小學校にては大抵女兒にも袴を着せしめ、衣服は筒袖なり。高等女學校は縣立、私立、合せて四校あり、其他女子に専門的になさしむる染織學校あり、生徒の數も多き方なり。女子教育は近年に至りて長足の進歩をなせり、女子高等師範學校の卒業生も土地の狭き割合には多く、これ等の人々は皆師範學校又は高等女學校に奉職し、熱心に數多の子女を教育しつゝあり、目下在校生は五人あり、又同校は入學志望のものも多くあり

一般に女子にして教師とならんとの望を有するもの多し。

海外彙報

●幼稚園保育法

●現今の幼稚園保育の方法の一

たる手技に於て、其余りに幼児の細微なる筋肉の練習にのみ偏せるは、吾人の既に早くより感じた所なりしが、近刊の米國雜誌スクール、ジヨルナルに載する所に見るに、

マサツチエセット洲チールセスターの各幼稚園に於ては、幼児期に於て余り早く手首及指端の修練より來たる痙攣及神經疲勞を避けしめ且つ大筋肉を發達せしめんが爲めに、黑板上に自由に大圓三角形其他の形を畫かしめつゝあり。且つ學校衛生上從來の如き小積木や、細微なる箸等を使用するは微細の筋肉を動かしめ、且つ神經機關を害する危険ありとの根據の下に殆んど幼児の拳大の積木を使用しつゝあり。

尙且つ幼児の脊及足の筋肉を發達せしめんが爲に、梯子を床の上に横たへて、幼児をして一歩一歩之を眞直に跨げしむる等の遊をも行へり。

吾人は又、我國多數の幼稚園に於ては、機の配置方を始め、室の使用の方法の如き、餘りに規律的にて、餘りに學校的にて、所謂遊戲性を利用しての教育場としては、頗るふさはしからぬものなるを感ずること久し。ヲールセスターの幼稚園に見ても、其他彼國雜誌等に散見せるものに付きて見ても、多く幼兒輩が床上に於て、或は兩足を投げ出し或はアグラを組みつゝ、極めて自由の姿勢態度を以て手技に従事しつゝあり。幼兒の身長などに適せざる机腰掛をイカメシク配置して、無理やりに究屈に長時間彼等を之に倚らしめてにあらざれば、保育の出來ざるものゝ如くに考ふる人は、宜しく一考ありたきものなり。

●英帝戴冠式 病氣の爲め、延期仰出されたる

英國皇帝の即位戴冠式は、愈先月九日正午、倫敦

市ウエストミニスター寺院に於て舉行せられたり
 ▲英皇帝の貧民饗應 英皇帝エドワード陛下が戴冠式の祝ひとして去月五日倫敦の貧民五十萬人に晚餐を賜はりたることは、當時ロイテルの傳へたる所なるが、今英國新聞の報する所に據れば、其際晚餐の爲に費されたる食料は牛肉三十五万斤、羊肉十三万斤、犢肉七万斤、ハム五万斤、四斤の麵麴七万五千個、莖莖一万一千把、胡瓜四万三千本、トマト二万五千斤、馬鈴薯四十万斤、チーズ六万二千五百斤、ビール三万六千ガロン、ジンジャービーア十五万バインド等にして食卓及び腰掛を設くる爲に要したる板の長さは二百六十哩に及び當日貧民の腰掛けたる椅子を積み上ぐる時は、我富士山の百倍の高さに達すべしといふ。

謹告

- 一、本號記事輻輳に付き、寄書及會報を省略せり。
- 一、各地方通信は、續々御寄稿を乞ふ。
- 一、原稿メ切は、毎月十五日のこと。

會告

- 一、會員御轉居の節は、其都度早速御報知下されたく候。然らざれば、双方餘計の手續を煩はすこと、間々、之あるべく候。
- 一、會費相切れ候節は、早速御納め下され度く候。御延引の方へは、失禮とは存じ候へども、已むなく御催促申し上ぐべく候。但し、必らず女子高等師範學校附屬幼稚園内フレブル會宛にて御納め下され度候。
- 一、入會御希望の方は會費（一ヶ月十錢）前納と共に直接本會へ御申し込み下されて宜しく候。

家庭

『家庭の使命』

意を迎へて飾り、氣を計りて装ふことは「家庭」の克くせざる所「家庭」は驕奢浮薄の壞たるよりも、眞摯素樸の少女たらしむと欲するのである、一時の愛嬌よりは永久の安慰を與へ一時の喜びよりは永久の樂を與へんとするのである。

貧に泣く人、病に咽ぶ人、死を怖る人、「家庭」は實に諸姉の救済者である。

名を欲して苦しむ人、位を求めて憫む人、浮世の戀に悶ゆる人、「家庭」は實に諸姉の慰安者である。

夫を怨む妻、舅姑を怖る嫁、繼母に泣く少女、家庭は實に諸姉の師友である。

苦める母に喜を與へ、憫める姉妹に樂を與へ、以て暗黒の家庭を光明に素亂の家庭を平和に導き玉ふ大慈悲の御點みを傳ふるのである。

是「家庭」が有する使命である。「家庭」は此使命を以て勇猛精進しつゝあるのである。

東京市本郷區東片町一三五番地

家庭發行所

毎月一回五日發行◎明治三十五年八月第二卷第八號發行
◎定價一部金八錢◎半年分前金四十二錢◎一年分前金八十錢(郵税共)郵券代用一割増

▲家庭第一の讀もの▼

女子新聞

第壹號

八月十七日發行

本紙は毎週金曜日曜日に發行し、女子の好誼友たることを期す、

第一號記事の要目は

○祝詞 二條公、近衛公、交野子、佐々木信綱、三輪田眞佐子外十餘家○眞筆 詩(永坂石塚)歌(多田親愛)俳句(尾崎紅葉)挿畫は(山本松谷、筒井年峰、公文菊仙)女子新聞發刊に就て 中川愛永○家政の改革 柳澤伯○季節の料理 石井泰次郎○作法の事 松岡止波子○社會音樂の改良 上原六四郎○かたらし草 横井文學博士○女子の愛海心 平田骨仙、其外記事山の如く、趣味盡くる所を知らず

○第二號 八月二十四日發行 ○第三號 八月三十一日發行

●第四號 来る七日を以て發行す、

定價

一部金參錢一ヶ月前金十錢 半年前金五十五錢 一年前金壹圓 市外は郵税一ヶ月二錢

發行所

東京市京橋區鈴木町十一番地

女子新聞社

石井泰次郎著

作法講習抄

女子作法書の随一ともいふべき本書は、去八月三日を以て發行したり、其編中の要目は

○口繪 は系統的にして、禮節の變遷を一見するに足る、寫し出されたる人物は

高橋宗芳朝臣 伊勢貞丈 水鳥之成 石井泰次郎

○組織 は文明的にして、二號字の目次は

其一 戶外禮 其二 乘車禮 其三 乘馬禮

其四 會場禮 其五 訪問禮 其六 家庭禮

其七 懇親禮 其八 進物禮 其九 捧授禮

其十 起居禮

○製本 は美術的にして紙質極めてよき四六版、表紙は大意匠にて頗る美本

定價はと問はゞ一冊僅に一冊金卅錢、郵税不要

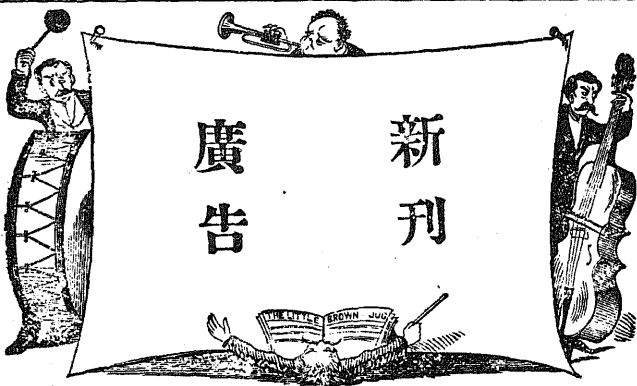
東京市京橋區鈴木町十一番地

發行所

大日本禮節學會

郵税一冊に就き金四錢

近來唱歌の流行普及に伴ひ、之が用書の發



新刊
廣告

及教授せし
らざるべし

發行するもの多し、且て其の價目も、
錢
全四冊用
 第一卷定價金三十錢
 第二卷定價金三十錢
 第三卷定價金三十錢
 第四卷定價金三十錢
生徒用
 第一卷定價金三十錢
 第二卷定價金三十錢
 第三卷定價金三十錢
 第四卷定價金三十錢
 今各地に於ける唱歌普及上の状況、
 並に其教授上一般の経験及意見等、
 編者集めて統計したるに於て、
 數百曲の歌曲を蒐集して得た、
 及文學の數大家在京中の音樂、
 撰譯す、なほ曲毎に其自來の音、
 調子等を定め附記し、音程度及季、
 等の順序に従ひ、最も系統正し、
 之の教科書として最も適切な、
 なくは全本書別に教案を作る、
 其教授を進行し得るものとす、然し
 て本書に之を生徒用と教師用の二
 りに分ち、其生徒用は假名遣ひの
 文字の大等、凡て文部省の規定に
 從つて印刷し、又其教師用にハ毎
 曲特記詞義、曲解、樂曲の欄、
 演奏法、及教授上の諸注意、該科
 の學習に附記したれば、決して誦言
 にあらず、

吉田信太編
方舞

舞
全壹冊
定價金四拾五錢
郵稅金六錢

本書は女子高等師範學校其他の學校に於ける、舞蹈の方法及樂譜を記載せし者也

洋琴

琴 金參百圓以上
貳千圓迄 各種

ワイオ

オリン

樂隊用樂器

用樂器

ル子ツト、ト迄

トロンボン等金貳拾圓以

鼓隊用樂器

用樂器

手風琴

琴
金二圓五拾錢以上
參十圓迄各一種

附保險
山葉風琴

葉風琴
定價金十六
以上貳百

外兩用風琴、
其也各樂器並

風琴、吹風琴、ハーモニカ、フラ
楽器並に和洋音樂書各音樂附

調

調律修繕

郵券二錢

目錄

(ヨキ號略信電)
番九廿百五橋新話電

店器樂社商益共

區橋京市京東
地番三十町川竹